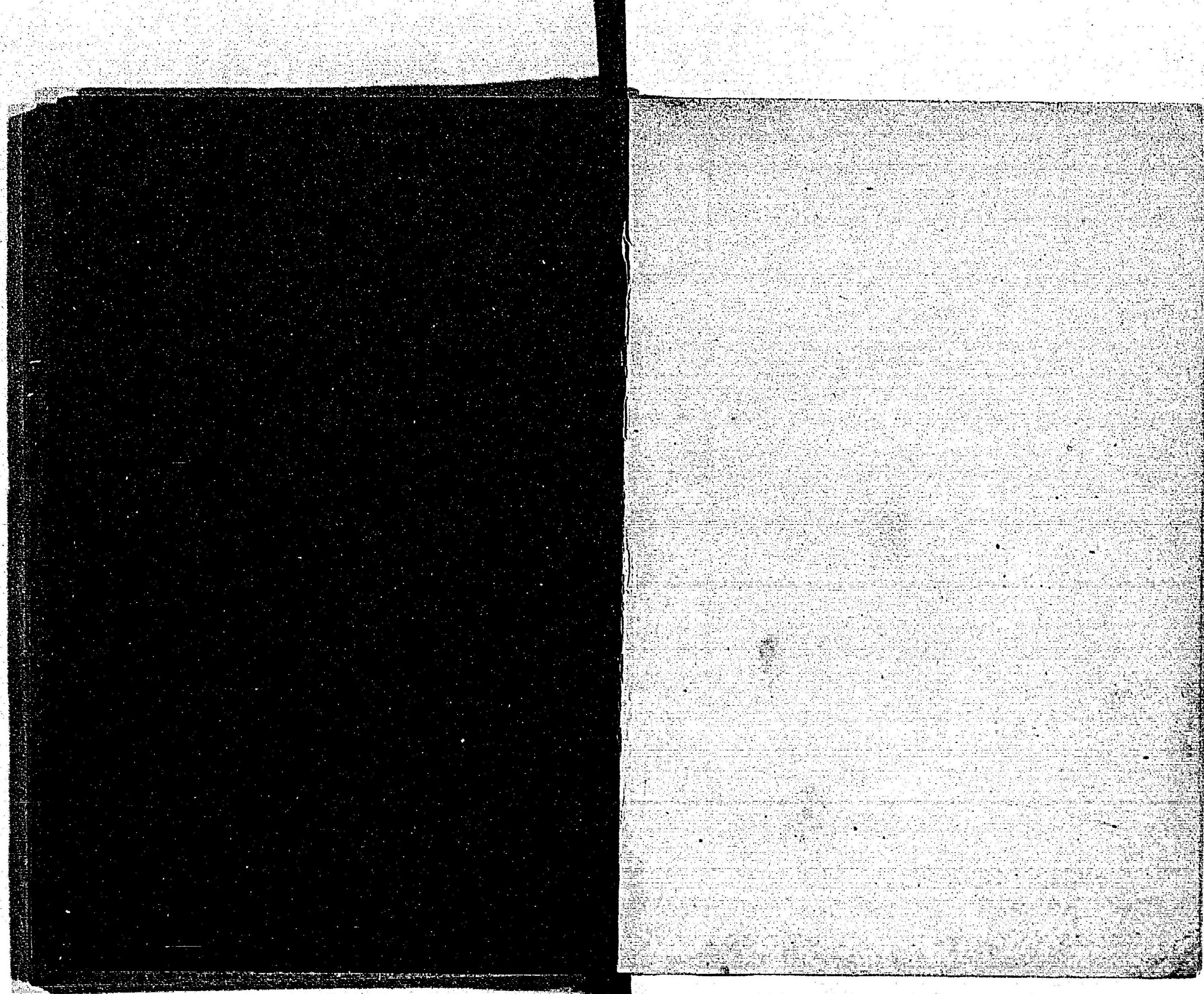


446
682

禪
學
譚



禪 學 譚

禪 學 譚 序

野橋下丑の春長天の書肆松月堂何某とかや聞かして遠く草書と吾を裁し
 が鶴林近侍の左右に寄せて云く伏して承る老師の古紙堆中及翻開話と
 かや云へる草稿あり書中多く氣を鍊り精を養ひ人の營衛として充たし
 め専ら長生久視の秘訣を聚む謂ゆる神仙鍊丹の至要なりと是故に世の
 好事の君子是をかもふ事早の雲霓の如し偶々雲水の徒侶竊かに傳寫
 し來る有も秘重し珍藏して人おして見せしめず天瓢ひなしく櫃に納め
 て匿したるか如し願くは是れを梓に壽かふして以て其渴を慰せん聞く
 老師常に人を利するを以て老後を樂しみ玉ふと若夫人に利あらは師豈
 に是を吝しみ玉わんやと二虎合み來て師に呈す師微々として笑ふ此に
 かいて諸子舊書櫃を開けば草稿鱸魚の腹中に葬らるゝ者中葉に過たし
 諸子即ち訂正傳寫して既に五十來紙を見る即ち封裏して以て京師に寄

せんとす予が馬齒一日も諸子に長たるを以て其端由を書せん事を責む
予も亦辭せずして書す云く師鶴林に住する事大凡四十年鉢囊を掛けし
より以來雲水參玄の布衲子纒かに門因に跨れば師の毒涎を甘なひ痛棒
を滋として辭し去る事を忘るゝ者或は十年或は廿年鶴林々下の塵と成
る事も亦總に顧みざる底あり盡く是叢林の頭角四方の精英なり各々西
東五六里が間に分れて舊舎廢宅老院破廟借て以て菴居の處として清苦
す朝艱暮辛盡餒夜凍口に投する者は菜葉麥糞耳に觸るゝ者は熱渴垢罵
骨に徹する者は噴拳痛棒見る者額集め聞者肌汗す鬼神もまた涙を浮へ
すべく魔外また掌を合せすべし其初め來る時は宋玉河晏が美貞有て肌
膚光澤凝れる膏の如くなる者も久しからずして恰も杜甫賈鵠か形容枯
槁顔色憔悴するが如く或は屈子に澤畔に逢ふか如し參玄驅命を顧ざる

底の勇猛の上士にあらざるよりんば何の樂しみ有てか片時も溘泊する
事を得んや是故に往々に參窮度に逼ぎ清苦節を失する族は肺金いたみ
かじけ水分枯渴して疝癰塊痛難治の重症を發せんとす是を憐み是を愁
て師ふ豫の色有間者連日乍ち忍俊不禁にして雲頭を按下し老婆の臭乳
を絞つて是に授るに内觀の秘訣を以てす乃ひ云く若し是參禪辨道の工
士心火逆上し身心勞疲し五内調和せざる事あらんに鍼灸藥のみつを以
て是を治せんと欲せば縦ひ華陀扁倉と云へとも輒く救ひ得る事能わじ
我に仙人還丹の秘訣あり你が輩から試みに是を修せよ奇功を見る事雲
霧を披びて皎日を見るか如けん若し此秘要を修せんと欲せば且らく工
夫を抛下し話頭を括放して先須らく熟睡一覺すべし其未だ睡りにつか
ず眼を合せざる以前に向て長かく兩脚を展べ強よく蹈みとるへ一身の

元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ時々此觀を成すべし我此の氣海丹田腰脚足心總に是我が本來の面目々々何の鼻孔がある我が此の氣海丹田總に是我が唯心の淨土々々何の莊嚴がある我が此の氣海丹田總に是我が已身の彌陀々々何の法をか説くと打返々々常に斯くの如く妄想すべし妄想の功果つもらは一身の元氣いつしク腰脚足心の間に充足して臍下瓠然たる事いまた篠打ち勢さる鞠の如けん恁麼に單らに妄想し持ち去て五日七日乃至二三七日を経たらむに従前の五積六聚氣虛勞役等の諸症底を拂て平癒せずんは智僧が頭を切り持ち去れ此に於て諸子歡喜作禮して密に精修す各々悉く不思議の奇功を見る功の迅速は進修の精麗に依るいへとも大半皆全快す各々内觀の奇功を讚謨して休

禪學

禪學

ます師の曰く你が輩心病全快を得て以て足れりとする事なかれ轉た治せば轉た參せよ轉た悟らば轉た進めさ僧初め參學の時難治の重病を發して其憂苦諸子に十倍せり進退惟谷まる尋常心にむそかに思惟すらく生きて此憂愁に沈まんよりは如かじ早死して此草囊を捨んにはど何の幸ぞや此の内觀の秘訣を傳へて全快を得る事今の諸子の如し至人の云く此は是神仙長生不死の神術なり中下は世壽三百歳なるべし其餘は計り定むべからず予則ち歡喜に堪へず精修怠らざる者大凡三年心身次第に健康に氣力次第に勇壯なる事を覺ふ此において重ねて心に竊かに謂へらく縱ひ此眞悟を修し得て彭祖か八百の歳時を保ち得るも唯は一箇頑空無智の守尻鬼ならくのみ老狸の舊窠に睡るが如し終に壞滅に歸せん何が故ぞ今既に獨りも葛洪鐵拐張華費張が輩を見ず如かじ四弘の大

誓を憤超し菩薩の威儀を學び常に大法施を行し虚空に先つて死せず虚空に後れて生ぜざる底の不退堅固の眞法身を打殺し金剛不壞の大仙身を成就せんには此において眞正參玄の上士兩參輩を得て内觀と參禪と共に合せ並らべ貯へて且つ耕へし且つ戰ふ者蓋し茲に三十年年々一員を添へ二肩を増し得て今既に二百衆に近かし其中間方來の衲子勞屈疲倦の族ら或は心火逆上し正に發狂せんとする底を憐み密かに此内觀の至要を傳授し立所に快癒せしめ轉た悟れば轉た進まじし馬年今歲古稀に越へたりと云へども半點の病患なく齒牙全く揺落せず眼耳次第に分明にして動もすれば鬚鬣を忘る毎月兩度の法施終に怠倦せず請に佗方に應じて三百五百の海衆を聚會して或は五句七句を經に録に雲水の所望に隨て胡說亂道する者大凡五六十會に及ふと云へども終に一日も

體講齋を鎖さず身心健康氣力は次第に二三十歳の時に遙かに勝されり是皆彼の内觀の奇功に依る事を覺ふ住菴の諸子各々悲泣作禮して云く吾が師大慈大悲願くは内觀の大畧を書せし書して留めて後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ師即ち領す立處に草稿成る稿中何の説く處を曰く大凡生を養ひ長壽を保つての要形を鍊るの要神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり神凝る則は氣聚る氣聚る則は即ち眞丹成る丹成る則は形固し形固き則は神全し神全き則は壽がし是仙人九轉還丹の秘訣に契へり頌らく知るべし丹は果して外物に非ざる事を千葛唯心火を降下し氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ住菴の諸子此心要を勤めてはげみ進んで怠らすんは禪病を治し勞疲を救ふのみならず禪門向上の事に到て年來疑團あらむ人には大ひに手を拍して大笑する底

の大歡喜有らむ何が故ぞ月高して城影盡く
惟時寶曆丁丑 孟止二十五堂

窮乏庵主 飢凍炷香稽發題

禪學譚上

白隱述

山野初め參學の日誓つて勇猛の信心を憤發し不退の道情を激起し精鍊
刻苦する者既に兩三霜乍ら一夜忽然として落節す従前多少の疑惑根に
和して氷融し曠却生死業根底に徹して漚滅す自ら謂らく道ち人を去る
事筈に遠からず古人二三十年は何の捏怪ぞと怡悅蹈舞を忘る者數月向
後日用を廻顧するに動靜の二境全く調和せず去就の兩邊總に脱洒なら
ず自ら謂らく猛く精彩を着け重て一回捨命し去んと越て牙關を咬定し
雙眼睛を登開し寢食ともに廢せんとす既にして未だ期月に亘らざるに
心火逆上し肺金焦枯して雙脚氷雪の底に浸すか如く兩耳溪聲の間を行

禪
 學
 譚
 かく如し肝膽常に怯弱にして舉措恐怖多し心神困倦し寐寤種々の境界
 を見る兩腋常に汗を生じ兩眼常に涙を帶ふ此に於て遍く明師に投し廣
 く名醫を探ると云へども百藥寸切なし或人曰く城の白河の山裏に巖居
 せる者あり世人是を名けて白齒先生と云靈壽三四甲子を閱みし人居三
 四里程を隔つ人を見る事を好まず行く則は必ず走て避く人其賢愚を辨
 する事なし里人専ら稱して仙人とす聞く故の丈山氏の師範にして精く
 天文に通じ深く醫道に達す人あり禮を盡して咨叩する則は稀れに微言
 を吐く退ひて是を考るに大ひに人に利ありと此に於て寶永第七庚寅孟
 正中院竊かに行纏を着け濃東を發し黒谷を越へ直ちに白川邑に到り包
 を茶店におろして齒か巖栖の處を尋ね馬人遙かに一枝の溪水を指す即
 ち波の水聲に隨て遙かに山溪に入る正に行く事里ばかりに乍ち流水を

禪
 學
 譚
 踏斷す樵徑もまたなし時に一老夫あり遙かに雲煙の間を指す黃白にし
 て方寸餘なる者あり山氣に隨て或ひは顯はれ或ひは隠る是齒か河口に
 垂下する所の蘆簾なりと予即ち裳を褰けて上る巖巖を踏み蒙茸を披け
 ば冰雪草鞋を咬み雲露衲衣を壓す辛汗を滴て苦膏を流して漸く彼の蘆
 簾の處に到れば風致清絕實に物表に丁々たる事を覺ふ心魂震ひ恐れ肌
 膚戰栗す且らく巖根に倚て數息する者數百少焉つて衣を振ひ襟を正し
 て畏づく鞠躬して簾子の中を望めは朦朧として齒か目を收めて端座す
 るを見る蒼髮座膝に到り朱顏麗ふして棗の如し大布の袍を掛けて輭草
 の席に座せり窟中纒かに方五六笏にして全く養生の具無し机上只中庸
 と老子と金剛般若とを置く予則ち禮を盡して苦るに病困を告げ且つ救
 ひを請ふ少巖齒眼を開ひて熟々視て徐々として告げて曰く我は是山中

牛死の陳人樞粟を捨て食ひ鹿糜に伴つて睡る此外更に何をか知らんや
 自ら愧づ遠く上人來望勞する事を予則ち轉々咨叩して休まず時に齒恬
 如として予が手を提らへて精しく五内を窺ひ九候を察す爪甲長こと半
 寸慘々乎として頰攢めてつげて云く己哉觀理度に過ぎ進修節を失して
 終に此の重症を發す實に醫治し難き者は公の禪病なり若し鍼灸藥の三
 ツの物を待んで而して後に是を救わむと欲せば扁倉力をつくし華陀頰
 を攢むるも奇功を見る事能はじ公今既に觀理の爲に破らる勤めて内觀
 の功を積ますんは終に起つ事能はじ是彼の倒起は必らず地に依るの謂
 なり予は曰く願くは内觀の要秘を聞かん學びかてらは是を修せん齒齟
 々として容を改め從容として告て曰く嗚呼公の如きは問ふ事を好むの
 士なり我が昔し聞ける處を以て微しく公に告んか是養生の秘訣にして

禪 學 課

人の知る事稀なり怠らずんは必ず奇功を見久視も又期しつくし夫大道
 分れて兩儀あり陰陽交和して人物生る先天の元氣中間に默運して五臟
 列り經脈行わる衛氣營血互に昇降脩環する者晝夜に大凡五十度肺金は
 牝藏にして膈上に浮び肝木は牡藏にして膈下に沈む心火は大陽にして
 上部に位ひし腎水は大陰にして下部を占む五臟に七神あり脾腎各々三
 神を藏くす呼は心肺より出て吸は腎肝に入る一呼に脈の行く事三寸一
 吸に脈の行く事三寸晝夜に一万三千五百の氣息あり脈一身を巡行する
 事五十次火は輕浮にして常に騰昇を好み水は沈重にして常に下流を務
 む若人を察せず觀照或は節を失し志念或は度に過る則は心火衝して肺
 金焦薄す金母苦しむ則は水子衰減す母子互に疲傷して五位困倦し六屬
 凌奪す四大増損して各々百一の病を生す百藥功を立する事能はず衆醫

禪 學 課

總に手を束ねて修に告る處なきに到る蓋し生を養ふ事は國を守るが如し明君聖主は常に心を下に專にして暗君庸主は常に心を上に恣にす上に恣にする則は九郷權に誇り百僚寵を恃て曾て民間の窮困を顧る事無し野に菜色多く國餓季多し賢良潛み竄れ臣民懐恨む諸侯離れ叛き衆夷競ひ起つて終に民庶を塗炭にし國脉永く斷絶するに到る心を下に専らにする則は九卿儉を守り百僚約を勤めて常に民間の勞疲をしるゝ事なし農に餘まんの粟あり婦に餘まんの布にて群賢來り屬し諸侯恐れ服して民肥へ國強く金に違するの悉民なく境ひを侵すの敵國なし國に叫の聲を聞く事なく民戈戟の名を知らず人身もまた然り至人は常に心氣をして下に充たしむ心氣下に充する則は七凶内に動く事なく四邪また外より窺事能はず營衛充ち神心健かなり口ち終に藥餌の耳酸を知らず

譚 學 譚

身終に鍼灸の痛痒を受けず庸流は常に心氣おして上に恣にす上に恣にする則は左寸の火右寸の金を尅して五官縮まり疲れ六親苦しみ恨是故に漆園曰く真人の息は是を息するに踵を以てし衆人の息は是を息するに喉を以てす許俊が云く蓋し氣下焦に在る則は其息遠く氣上焦に有る則は其息促まる上陽子が曰く人に真一の氣有り丹田の中に降下する則は一陽又復す若人始陽利復の候を知らむと欲せば暖氣を以て是が信とすべし大凡生を養ふの道上部は常に清涼ならん事を要し下部は常に温煖ならん事を要せよ夫經脈の十二は支の十二に配し月の十二に應じ時の十二に合す六爻變化再周して一歳を全ふするが如し五陰上に居し一陽下を占む是を地雷復と云ふ冬至の候なり真人の息は是を息するに踵を以てするの謂か三陽下に位し三陰上に居す是を地天泰と云ふ孟正の

譚 學 譚

候なり萬物發生の氣を含んで百花春化の澤を受く至人元氣にして下に
 充たしむるの衆人は是を得る則は營衛充實し氣力勇壯なり五陰下に居し
 一陽上に止まる是を山地剣と云ふ九月の候なり天是を得る則は林苑色
 を失し百花荒落す是衆人の息は是を息するに喉を以てするの象人は是を
 得る則は形容枯槁し齒牙搖き落す所以に延壽書に云く六陽共に盡く則
 是金陽の人死し易すし須らく知るべし元氣をして常に下に充しむ是生
 を養ふ樞要なる事を昔し吳契初石臺先生に見ゆ齋戒して鍊丹の術を問
 ふ先生の云く我に元玄真丹の神秘あり上々の器にあらするよりんは得
 て傳ふべからず古しへ黃成子は是を以て黃帝に傳ふ三七齊戒して是を受
 く夫大道の外に真丹なく真丹の外に大道なし蓋し五無漏の法あり汝の
 の六欲を去け五官各々其職を忘るゝ則は混然たる本源の直氣彷彿とし

禪 學 譚

て目前に充つ是れ彼の大白道人の謂ゆる我が天を以て事る所の天に合
 する者なり孟軻氏の謂ゆる浩然の氣是れをひきひて臍輪氣海丹田の間
 に藏めて歳月を重ねて是れを守て守一にし去り是れを養ふて無適にし
 去て一朝乍ら丹甕を掀翻する則は内外中間は竝四維總て是れ一枚の大
 還丹此時に當つて初めて自己即ち是れ天地に先つて生せず虚空に後れ
 て死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なることを覺得せん是れを眞正
 丹龍功なる底の時節とす豈に風に御し霞に跨がり地を締め水を踏む等
 の鎖末たる幻事を以て懐とする者ならんや大洋を攪ひて酥酪とし厚土
 を變じて黄金とす前賢曰く丹は丹田なり液は肺液なり肺液を以て丹田
 に還へす是れ故に金液還丹と云ふ予が曰く謹んで命を聞きいさ且らく
 禪觀を抛下し努め力めて治するを以て期とせん恐るゝ處は李士才が謂

禪 學 譚

ゆる清降に偏なる者にあらずや心を一所に制せば氣血或ひは滯碍することなからむか幽微として笑て云く然らず李氏云はずや火の性は炎上なり宜しく是れを下らしむべし水の性は下れるに就く宜しく是れをして上らしむべし水上り火下る是れを名けて交と云ふ交る則は既済とす交らざる則は未済とす交は生の象不交は死の象なり李家が謂ゆる清降に偏なりとは丹溪を學ぶ者の弊を救はむとなり古人云く相火上り易きは身中の苦しむ所ろ水を補ふは火を制する所以なり蓋し火に君相の二義あり君火は上に居して静を主さとり相火は下に處して動をつかさどる君火是れ一心の主なり相火は宰輔たり蓋し相火に兩股あり謂ゆる腎と肝となり肝は雷に比し腎は龍に比す是れ故に云ふ龍をして海底に歸せしめは必ず迅發の雷なけん但し雷をして澤中に藏れしめは必ず飛騰

學 問

の龍なけん海か澤か水にあらずと云ふことなし是れ相火上り易きを制するの語にあらずや又曰く心勞煩する則は虚して心熱す心虚する則は是を補するに心を下して以て腎に交ゆ是れを補ふと云ふ既済の道なり公先に心火逆上して此重病を發す若し心を降下せずんば假令ひ三界の秘密を行し盡したりとも起つと得し且つ又我が形ヲ摸道家者流に類するを以て大ひに釋に異なる者とするが是れ禪なり他日打發せば大ひに笑つべきのこと有らむ夫れ觀は無觀を以て正觀とす多觀の者を邪觀とす向さに公多觀を以て此重症を見る今ま是れを救ふに無觀を以てすまた可ならずや公若し心炎意火を收めて丹田及び足心の間におかば胸膈自然に清涼にして一點の計較思想なく一滴の穢浪情波なけん是れ眞觀清淨觀なり云ふことなけれしばらく禪觀を抛下せんと佛の言はく心を

學 問

足心におさめて能く百一の病を治すと阿含に酥を用ゆるの法あり心の
 勞疲を救ふこと最も妙なり天台の摩訶止観に病因を論ずること甚だ盡
 せり治法を説くことも亦甚だ精密なり十二種の息ありよく象病を治す
 臍輪を縁して豆子を見るの法あり其大意心火を降下して丹田及び足心
 に收るを以て至要とす但し病を治するのみにあらず大ひに禪觀を助す
 く蓋し繫縁諦眞の二止あり諦眞は實相の圓觀繫縁は心氣を臍輪氣海丹
 田の間に收め守るを以て第一とす行者是れを用ゆるに大ひに利あり古
 しへ永平の開祖師大宋に入て加淨を天童に拜す師一日密室に入て益を
 請ふ淨曰く元子坐禪のとき心を左の掌るの上にかくべしと是れ即ち顛
 師の謂ゆる繫縁止の大畧なり顛師初め此の繫縁内觀の秘訣を教へて其
 家兄鎮慎が重病を萬死の中に助け救ひ玉ふことは精しくは小止觀の中

禪 學 譯

に説けり又白雲和尚曰く我れつねに心をして腔子の中に充たしむ徒を
 匡し衆を領し賓を接し機に應じ及び小參普説七經八横の間において是
 れを用ひてつくることなし老來殊に利益多きことを覺ふと誠に費ふべ
 し是れ蓋し素問にみゆる恬澹虚無なれば眞氣是れにしたがふ精神内に
 守らは病ひ何れより來らむと云ふ語に基づき玉ふ者ならむか且つ夫れ
 内に守るの要元氣をして一身の中に充塞せしめ三百六十の骨節八万四
 千の毛竅一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめんことを要す是れを養ふ
 至要なることを知るべし彭祖が曰く和神導氣の法當さに深く密室を鎖
 さし牀を案し席を煖め枕の高かさ二寸半正身偃臥し瞑目して心氣を胸
 膈の中に閉ざし鴻毛を以て鼻上につけて動かざること三百息を経て耳
 聞く處なく目見る處なく斯の如くなる則は寒暑も侵かすこと能はず蜂

禪 學 譯

蜀も毒すること能はず壽き三百六十歳是れ真人に近かしと又蘇内翰か
 曰く已に飢へて方さに食し未だ飽かずして先づ止む散歩逍遙して務め
 て腹をして空しからしめ腹の空なる時に當つて即ち靜室に入り端座黙
 然して出入の息を數へ上一息よりかぞへて十に至り十より數へて百に
 至り百より數へ放ち去て千に至て此身忽然として此心寂然たること虚
 空と等し斯の如くなること久ふして一息かのづから止まる出せず入ら
 ざるるとき此息は八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如し無始劫來
 の諸病自ら除き諸障自然に除滅することを明悟せん譬へば盲人の忽然
 として目を開くが如けん此時人に尋ねて路頭を指すことを用ひず唯要
 す尋常言語を省零して爾ちの元氣を長養せんことを是れ故に云ふ目力
 を養ふ者は常に瞑し耳根を養ふ者は常に飽き心氣を養ふ者は常に黙す

と予が曰く酥を用ゆるの法得て聞ひつべしや幽が曰く行者定中四大調
 和せず身心ともに勞疲することを覺せば心を起して應さに想をなすべ
 し譬へば色香清淨の軟蘇鴨卵の大ひさの如くなる者頂上に頓在せんに
 其氣味微妙にして遍く頭顱の間をうるかし浸々として潤下し來て兩肩
 及び雙臂兩乳胸膈の同肺肝腸胃脊梁腎骨次第に活注し將ち去る此時に
 當つて胸中の五積六聚疝癰塊痛心に隨つて降下すること水の下につく
 が如く歷々として聲あり遍身を周流し雙脚を温潤し足心に至て即ち止
 む行者再び應さに此觀をなすべし彼の浸々として潤下する所の餘流積
 もり湛へて煖め蒸すこと恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め是れを
 煎湯して浴盤の中に盛り湛へて我が臍輪は下を漬け蒸すが如し此觀を
 なすときは唯心所現の故に鼻根乍ち希有の香氣を聞き身根俄かに妙好

の輭觸を受く身心調適なること二三十歳の時には遙かに勝れり此時に當つて積聚を消融し腸胃を調和し覺へず肌膚光澤を生ず若し其勤めて怠らずんば何れの病か治せざらん何れの徳かつまさらん何れの仙か成せざる何れの道か成せざる其功驗の遲速は行人の進修の精意に依らるのみ走り始め卅歳のとき多病にして公の患ひに十倍しき衆醫總に顧みざるに至る百端を窮むといへども救ふべきの術なし此に於て上下の神祇に祈りて天仙の冥助を請ひ願ふ何の幸ひぞや計らずも此の輭酥の妙術を傳受することを歡喜に堪へず綿々として精修す未だ期月ならざるに衆病大半消除す爾來身心輕安なることを覺ゆるのみ癡々忽々月の大小を記せず年の潤餘を知らず世念次第に輕微にして人欲の舊習もいづしか忘れたるが如し馬年今歲何十歳なることもまた知らず中す端由

存つて若丹の山中に潛遁する者大凡三十歳世人都て知ることなし其中間を顧るに恰も黃梁半熟の一夢の如し今ま此の山中無人の處ろに向て此枯稿の一具骨を放つて大布の單衣纒かに二三片を掛け嚴冬の寒威綿を析くの夜々いゑとも枯腸を凍損するにいたらず山粒すでに斷へて穀氣を受けざることも動もすれば數月に及ぶといへども終に凍餒の覺へも無きことは首な此觀の力ならざるや我れ今ま既に公に告るに一牛用ひ盡さるる底の秘訣を以てす此外更に何をか云んやと云ひて目を收めて默座す予も亦た涙を含んで禮辭す徐々として洞口を下れば木末纒かに殘陽を掛く時に屐聲の丁々として山谷に答ふるあり且つ驚き且つ怪しんで畏づく回顧すれば遙かに幽が巖窟を離れ自ら送り來るを見る即ち曰く人迹不到の山路西東分ち難し恐らくは歸客を惱せん老夫しばらく

歸程を導かんと云ひて大駒履を着け瘦鳩杖をひき曉巖を蹈み險阻を涉
 ること飄々として坦途を行くが如く談笑して先驅す山路遙かに里許り
 を下つて彼れ溪水の處ろに至つて即ち曰く此の流水に随ひ下らば必ず
 白川の邑に至らひと云ひて慘然として別かる且らく柴立して幽か回歩
 を目送するに其老歩の勇壯なること飄然として世を遁れて羽化して登
 仙する人の如し且の羨み且の敬す自ら恨む世を終るまで此等の人に随
 逐すること能はざることを除々として歸り來つて時々彼の内觀を潛
 修するに纔かに三年に充たざるに從前の衆病藥餌を用ひず鍼灸を假ら
 ず任運に除遣す特り病を治するのみにあらず從前手脚を挾むこと得ず
 齒牙を下すこと得ざる底の難信難透難解難入底の「着子根」は透り底に
 徹して透得過して大歡喜を得る者夫凡六七回其餘の小悟怡悅附舞を忘

禪 學 禪

る者數をしらず妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟數を知らずと初めで知
 る誠に我を欺かざることを古へ二三篇の機を著すと云ふとも展轉に
 氷雪の底に浸すが如くなる者今も既已三冬嚴寒の日と云ふへとも覆せず
 爐せず馬齒既に古稀を越へたりと云ふとも指すべし半點の小病もまた
 なきことは彼の神術の餘勳ならんか云ふことなけれ蘭林半死の殘喘多
 少無義荒唐の妄談を記取して以て他の上流を誑惑すと是れ宿に靈骨
 有つて一槌に既に成する底の後流の爲めに設くるにあらず癡鈍子が如
 く勞病予に類ひする底看讀して任細に觀察せば必ず少しも補ひならん
 か唯恐る別人の手を拍して大笑せんことを何か故を馬枯笑を咬んで午
 枕に噓ひすし

禪 學 禪

實相眞如の日輪は生死長夜の闇を照らし本有常住の月輪は無明煩惱の

雲を拂ふ勇猛の衆生の爲めに成佛一念にあり憍怠の衆生の爲めには涅槃三祇に渉る是はく何れも云ひ合せてけふは大勢上ふ見られた近頃奇特でかゝりやる上云ふに及ばぬとながら去りては大切の時節なるをや推し付け生死到來三途の舊里にたれ歸つて叫喚燒熱黒繩兼合紅蓮大紅蓮の難所へ追ひ落されて無量恒沙の苦患を受ることばまのあたりなるぞや相ひ講まへて油斷是れ存るべからず憍怠に云はゆる實相眞如の日輪は生死長夜の闇を照らすとは昔し禁庭に蟠座有つて内宮へ勅便立つて神慮を疑はせたまひける時悉くも天照らす大聖神君一四句の偈を以て答へさせ玉ひたりける神勅なり此時にこそ神と云ひ佛といふ唯是れ水波の隔てなるとは初めて思ひ知られたるをやさる程に十方調御の如來も勇猛の衆生の爲めには成佛一念に有り憍怠の衆生の爲めには涅槃三祇にわたると説き置かせ玉ふ作廢坐か是れ即座成佛の一念とならば唯是れ勇猛精神の一刹那ならくのみ憍怠の衆生とは隨をや我れも人も偶々受けがたき人身を受け逢はがたき佛法に逢ひながら夢幻ろしのごとく千歳も百歳も生き果つべき心る持ちにて食ひたひやうに食ひ飲みたひやうに飲み寐たひやうにいねあそびたひやうに遊んで芥子ばかりの善提心もなく一芥のごとには五斗ばかり腹を立て五文のごとには五貫ばかりの氣をもみ頂上より足のうらまで全體三毒五欲五賊より六腑を貫らぬひて總に是れ貪欲瞋恚毎日朝より暮に至るまで身三口四の十惡をつくりかさねて負ひかたげて冥途に入る其初め死する時は何の正體もなく濃く寐入りたる如く何の覺へもなく少焉幽に性根つきて目をひらけばいつしか冥府に落入る死出の山三途の河原など恐ろしき難

禪 學 譚

禪 學 譚

をひらけばいつしか冥府に落入る死出の山三途の河原など恐ろしき難

所の自ずから知るは、地獄の園路なるは、五里の十里をたどり行よ
 と思へば、方量もなまひるま、地獄に出入此所は、月日の流るはなきて大火
 事場のことし、是れ皆な焦熱大焦熱の猛火の焔はのこと、然るもがらも
 のや、其中に罪人どもの透間もなく、群を居てわん、と泣き叫ぶ様のみまし
 やかなしや、な我をばはからず、も欺くおろし、悪所にしすみたるぞや
 娑婆に斯くおろし、所るありと露知らざりし、くやしき上夢になり
 とも知りたらし、ましかは身をすて命にかけても、後世の願ひやうも菩提の
 求め様も有るへ、まもの邪見悪智の人々の常に彼の天堂地獄などいへ
 るは根もなまら、まことなるを、其證據には開闢より、塔來終に一人も地
 獄くるし、とて立ち歸りたる者なく、終に捨て文、一々越しなる者なし、是れ
 決定して地獄天堂無き現證なるを、鐵金は又た有るを、たもさす、かみの

禪 學 禪

罪作りたる覺り、まどなければ、人は殺さず、火は付けず、地獄へ落つへ、ま種
 ことなければ、もし又た罪なき者の落つる地獄ならば、それはせひなき次第
 なるぞや、人並く、なるものを、我れも人も、貴さもいやしきも知るもしら
 ぬも、諸共に手を取合ふて落べ、まはと云ひしを口惜しや、面白く、賢きこと
 宣ふ人哉、と貴く有難きことに思ひなし、と偶々うけがたき、人身を受付千
 生方劫にも逢ひ難き佛法に逢ひながら、何の辨へもなく、まながら、牛馬同
 前の心持ちに、たやれ、まと三途に歸へる、くやしきま、今はせんかたこと
 なければ、見わたせば、賢さも賤しきも、老たるも若さも知るも、知らぬも皆な
 盡く、猛火の底に在りて、泣き苦しむ、聲は聞くに、膽裂心碎くるか、如しいに
 しへ、貴き聖の常に、候かせ玉ひけるは、一度三途に入りぬれば、二たび歸る
 こと、まど、まど、打た、まど、念佛せさせ玉ひけるよし、實に貴き御教へなる

禪 學 禪

とは今こそ思ひ知られたるぞや又たいこの世間浮に歸ることの有るへ
 き喉を濕すに一滴の水なく口に投するに一粒の米なし四方八面盡く皆
 な猛火なれば立ち忍ぶべき所こそ無けれ見渡せばあれにて泣き苦しみ
 玉ふはいたはしや我が父うへにておはすぞや此方なるはまさしく我が
 妹なるぞやあなたにて一所に責め苦しめられ玉ふは上もなき貴き方々
 と見へさせ玉ふいかなる御誤りあつてか斯くまでは辛き目を見させ玉
 ふやらん昔し延喜の帝様の簫か岩屋の日藏上人に對し云ふならく奈落
 の底に沈みては利利も首陀も替らざりけると詠しさせ玉ふも直ちに今
 ま目のあたりなるぞや宮も藁屋も大名も高家も地頭殿も代官殿も庄屋
 も名主も皆な盡く猛火の底にわくと泣き叫ぶ中にも出家沙門圓融方池
 の尼法師などの在俗の人々に劣らじ負じと叫喚兼合黒繩無間の底にし

譯 歌 舞

づみて苦しむ玉ふ中にも紫衣や紅衣の僧正上阿闍梨上和向上大善知識
 上など伏し拜れさせ玉ひしいともどもと人々の恐ろしき獄卒の杖に
 うたれて泣きくるしませ玉ふを見奉れば一際悲しく最愛しくこと
 覺ゆれ娑婆にて談議法談などに極樂と浄土と水鳥樹林と念佛念法とよ
 と上もなき難有きことども説かせ玉ふを聞ては我等式が境界には分に
 勝ちたることどもなるぞやさばかりの高き望みは事無きことなるぞと
 思ひ切つて往生浄土の望みはさらしくなかりけるぞや斯くおこるじや
 所ありと少しなりとも知りたらしめば豈に夫れ片時も油斷すへんや
 身を捨て命にかけても後世助かるべき道なしおらば願みまじへんもの
 を口惜しの今のなれのはとやな燈籠此所へ燈籠を落さぬたよし時は其
 つ驚き且の苦しみなおら思ひけるは世に悔みし諸物は世の中は教の限

譯 學 舞

りもなき出家沙門の人々なるをやかゝる苦しき所ありと少しなりとも
 教へ玉はいかゝる不覺はとらさらまじと專無き極樂咄しをのみ仕聞か
 せ玉ひけるゆへ今ま此はてしもなき惡所にしづみけるを返すくも
 うらめしきは世間の沙門法師輩なるやと恨らみかこちけるが能く
 く見れば彼の沙門法師輩も斯る所は露塵知り給はざりけるにこそたぐ
 ひもなき高位高官の僧侶紫衣紅衣の貴僧高僧達の塵俗の在家に少しも
 劣らせたまはで獄卒の手にかゝつて晝夜に責惱されさせ玉ふと遙かに
 見奉れば此人々も初めより露知り玉はざりけるにこそ鬼にも角にもせ
 ん方無きは我々が今のなれの果てなるをやなど皆なもろどもに聲はも
 惜ます泣き叫ぶ聲は天も崩れ落つべくこと覺ゆれば彼の止觀珠林
 十王經などに説き宣へ置せ玉ふ大略なるをや人々よ油斷し玉ふて油斷

禪 學 禪

し玉ひたらんには押しつひ憂さ目を見玉ふへさぞ良藥は口に苦く忠言
 は耳に逆ふと申せば尋常の極樂咄しには面白くは覺ゆるはなれども大
 地は打ちはずすとも運ひはなき物語なるをや
 時に聽衆に一人あり講座間近く進み出で難有や貴さやな者回如何なる
 勝縁にやかゝる不思議の勝會に逢ひ未曾有真正の所説を承ることかへ
 すくも難有けれ幾季末代の習ひ筋なき賤賈の郎僧のぬれ手に粟の極
 樂咄しをのみ聞ひて來世は心易きことにのみ覺へて毎日限りもなき罪
 業を積み重ねて懲りもなくもとの三途の舊里へ立ち歸りて無量劫數を
 經て果しもなき苦患をうくることは露知らで孩提の童子の無智なるが
 如く牛羊犬豕の昏愚なるに齊しく徒に日々衣食をのみ求めて飽き足る
 果てしもなく我れも人もやすくと受け難き人身を失ふこと飛驒の邊

禪 學 禪

土の我々にかざらば大凡扶桑六十州の間は西は築紫博多の浦東は都賀
 留合浦の果て京も田舎も押し並べて此經の影に佛のあり此佛の徳に
 より淨土に生る一唱彌陀號即滅無量罪と有るがらに罪は何れを作つて
 も消易きものを何程放逸に暮しても佛には成るやすきものをも心得て
 心に任せて罪業を積重ねて何の辨へもなく月日を送りて貴きも賤しき
 も皆な盡く惡所に墮する世の中に斯く未曾有の法會に逢ひ大に驚き大
 に恐れ俄かに睡夢の覺りたるがごとし去りながら唯此體にて捨て置
 き玉は、何を便にか生前限りもなき罪障を滅し果てしもなき惡趣を免
 がることを得んたとへば人の親の其子を救へて云く汝が輩ら各々勵み
 進んで各々家業を勤めま必ず怠ることなかれ油断したらんには末には
 必ず貧困に苦しめられて辛き目を見るべきを相かまへと油断すること

釋 學 師

なかれと種々教諭せんに其親兼て商沽を勤むべき乎には宜しく金銀の
 本手を渡し農業を勤むべきには膏腴の田畑を譲り與へて而して後に汝
 等常に勵みつとめよ油断することなかれ云は、頭を叩ひて命に隨かは
 ん若し本手をあたへず田畑を譲らず農を勤し商を勵めと云はんは其子
 何を便としてか農商を勤ん今師我が輩に對し勤めよや油断することな
 かれ油断したらんには死後には必ず惡所に墮すべきを教へ玉ふはさ
 なから金銀の本手をあたへず田畑を譲らず只家業を勤し油断はしすな
 と教ゆる親の如し我が輩も又左の如し何れの道を修し如何なる善を行
 じてか油断なく勵み勤めてか未來を助るべきや願くは來世を助るべき
 道しあらば精しく教へ玉ひ彼のの怒るし惡所を救ひ助け玉ひてよ熱
 き願ふに世間一切の出家沙門を稱して佛法僧の三寶の一數なりと歸命

釋 學 師

し尊信するとは常に無量の法財を積み貯へ勤めて大法施を行じて一切利益し玉ふ故なり家も人も罪報ひも曾て知らず死して三途に墮するとも又知らず恰も赤子のはらはひして井に趣かんに盲者三四人其傍らに在といへども夢にも曾て知らず見ざるがゆへに助くる心無きがなりし末代の出家沙門も又しかり因果應報も曾て知らず三途も六執もさらしく辨なきゆへにさながら盲者の赤子を救ふ心なきが如し和尚大慈大悲宜しく是れを憐察し玉へ予が曰く善哉哉問ふこと相構へて油断し玉ひそ油断し玉ひたらばかならず三途にしづみ玉ふべきと唯云ひすて置きたらんは左ながら赤子の井に趣くを見て危ひ哉此子は果して井に落べきとどのみ云ひて見捨て置くが如し我に神仙長生不死の大還丹即座成佛の秘訣あり眉毛を惜ます雨が輩に傳與せん謹んで精神を凝らし

學 禪

て聽受し打失するとなかれ汝等即ち今外面五尺の形骸男女あり僧俗あり老幼あり尊卑あり娟醜各々互に異なりとくにおひて僧愛妬害慳吝執着雲霧のめぐり湧が如く波浪の漲飛ぶが如し三毒穢に溢れ五欲胸に凝る日々多少の惡業習を積み重ね晝夜に六趣に輪廻し死しては必ず三途に墮す叫喚衆合黒繩無間の大苦患一身に聚り責む三祇百劫を経て休罷あることなし其受苦心も言葉も及ぶべからず佛の云はく一切地獄の衆生の苦患我もし詳に是れを説かば閻浮提の衆生聞き得て皆な盡く血を吐ひて死すべしと誠に恐るべく誠に慎むべし若し人如上三途の苦域を透過し八難の險所を超越し一超に如來地に直入し涅槃の大彼岸に至らんと欲せば謹んで精を静め心を凝らして汝が臍輪氣海丹田の間を點檢せよ全く男女の相なく僧俗の形なし老幼尊卑貧富娟醜一點の痕跡なし

學 禪

是れ彼黃成子が云はゆる至道の精査々冥々たり至道の極昏々點々たる者なりこゝにおゐて單々に點檢し仔細に照顧して晝夜に怠らざる時はいつしか思想盡き妄情泯滅して玉盤を擲推し氷樓を推倒するに齊ふして忽ち身心共に打失せん此において博進んで退かざる時は計らずも一日豁然として貫通して十方虚空なく大地寸土をなふして事物の表裏精麤盡さすといふこと無けん是れ彼の水平の謂ゆる身心脱落々々身心直に是れ古人の謂ゆる理盡き言葉窮つて技もまた窮まる鳳金網を離れ籠を脱する底の好時節隻手の聲を聞くこと白晝に掌上を見るが如し長河を撓ひて蘇略となし荆棘を變じて梅檀林となし鐵を轉じて金となす底の時節人間天上の善果是れに如かず假令ひ汝萬戶侯の富貴を得るも黃梁一炊半熟の夢富み四海を保つも死すればか必ず捨て去つて惡趣に

入る是れ故に言ふ富みは是れ一生の財身滅すれば即ち隨て滅す智は是れ萬代の寶命終れば即ち隨つて行く大凡世間一切所有の有情王侯より庶人に至り老幼尊卑僧俗男女馬牛犬豕豺狼麋鹿に至るまで正因佛性の大事を具足せずと云ふことなし是れを實相真如の日輪と名つけ本有常住の月輪といふ是を失する則は六趣廻の苦衆生流轉常没の凡夫となり忽然として是を得る刻は忽ち無上正覺を成じて三界無比の大事となる十力調御の如來と同じ此等の大事を明らめしめんかために我常に人と勤めて隻手無聲の微妙音を聞かしむ是れ彼の山姥がいはゆる一丁空しき谷の響は無生音を聞く便りとなるとは是れ此の隻手の聲をいへりけふは是れまてあすまた來り聞き玉へあめおこしく

禪學譚上畢

禪學譚下

禪學譚下

白隱述

答鍋嶋州矣近侍書

日之昨は遠路御便札益御勇健にて朝鮮人御馳走首尾よく相濟御安堵の旨一段御事に候草慮恙なく罷在候是又高慮を勞せられ間敷候且動靜二境の上に於て御工夫怠慢なく御心掛なされ候條珍重の御事に候其外に書中に仰越れ候件々逐一老僧が野情に相契ひ御奇特千萬の御事如何許り悦び入候總じて一切の修行者精進工夫の間に於て心掛悪く侍れば動靜の二境に障られ昏散の二邊に隔られ心火逆上し肺金痛み悴け元氣虚損して難治の病症を發するも間々多き事に侍り又内觀の眞修に依て能

禪學

々修鍊致し侍れば至極養生の秘訣に契て心身堅剛に氣力丈夫にして万
 事輕快に法成就にも到る事に候去程に大覺圓御も阿含部に於て右の經
 を委く教諭此あり天台の智者大師も其大意を汲で摩訶止觀の中に丁寧
 に示置れ侍り書中の大意は雜ひ何分の聖教を披覽し何分の法理を觀察
 し或は長坐不臥し或は六時行道すと云とも常に心氣をもて臍輪氣海丹
 田腰脚の間に充しめ塵務繁の問答客揖讓の席に於ても片時も放退せ
 ざる時は元氣自然に丹田の間に充實して臍下飢然たる事兼た篠打せよ
 を鞠の如し若人養ひ得て斯の如くなる時は終日坐して曾て飽す終日誦
 じて曾て倦す終日書して曾て困せず終日説て曾て屈せず從ひ日々に万
 善を行すと云とも終に退管の色なく心量次第に寛大にして氣力常に勇
 壯なり苦熱燠暑の夏の日も扇せず汗せず玄冬素雪の冬の夜も襪せず爐

せず世壽百歳を闋すと云とも齒牙轉墜剛なり怠らされば長壽を得若そ
 れ果して斯の如くならば何れの道か成せざる何れの戒か持たざる何れ
 の定か修せざらん何の徳か充ざらん若又如上の故實に達せず真修の秘
 訣を諳んせず妄りに自ら悟解了知を求めて觀理度に過き思念筋を失す
 る時は胸膈否塞し心火高ぶり上り兩脚氷雪の底に浸すが如く雙耳溪聲
 の間を行に齊ふして肺金痛み悴け水分枯渴して終に難治の重症を發し
 て命根亦保難きに至る是た、真修の正路を知ざる故なり寔に悲むべし
 蓋し摩訶止觀の中に假緣止諦真止と申す事の侍り只今申し談ずる内觀
 の法とはかの假緣止の大略にて侍り老夫も若かりし時工夫趣向悪く心
 源湛寂の處を佛道なりと相心得動中を嫌ひ靜處を好んで常に隱僻の處
 を尋ねて死坐す假初の塵事にも胸塞り心火逆上し動中には一向に入る

事得ず舉措驚悲多く心身鎮へに怯弱にして兩腋常に汗を生じ雙眼斷へず涙を帶常に悲歎の心多く學道得力の覺へは毛頭も侍らざりき何の幸ぞや中頃より知藏の指南を受けて内觀の秘訣を傳受し密々に精修する者三年従前難治の重病はいつしか霜雪の朝義に向ふが如く次第に消融し宿昔齒牙を挾む事得ざる底の難信難透難解難入底の惡毒の話頭は病に和して氷消し今歲從心の齡を経と云ども三四十歳の時より氣力十倍し心身ともに勇壯にして脇席をさす恣に偃臥せざる者動もすれば二三七日を経る事間之此あれども心力衰減せず三百五百燕領虎頭に圍繞せられて經論を講演し語録を評唱して三句五句を経れども曾て疲倦の色なき者は自ら覺ふ此内觀の力による事を初め養生を第一とし内觀工夫の間求めざるに不慮の省悟得力幾度と云敷を聞き只動靜の二境を嫌はず

取す密々に進修しもて行事第一の行持に侍り往々に靜中の工夫は思の外に墓行様に思はれ動中の工夫は一向に墓行の様に覺へらるゝ事に侍れど靜中の人は必ず動中に中は入事得ずたましく動境塵務の中に入時は平生の會處得力は迹形もなく打失し一點の氣力無して結句常尋一向に心がけは無き人よりは劣りて芥許りの事にも動轉して思の外に憶病なる心地あつて卑怯の働も間多き者に侍り然らば即ち何を指てか得力と云んや去程に大慧禪師も動中の工夫は靜中に勝る事百千億倍すと申置れ侍り博山は動中の工夫成し上らざる事一百二十斤の重擔を荷つて羊額嶺頭に上るが如しと申されき蓋かく云ばとて靜中を捨嫌つて故意に動處を求玉へと云にはあらず只動靜の二境を覺へず知ぬ程工夫純一なるを貴とす所以に言真正參禪の衲子は行て行事を知す坐して坐す

事を知すと云に就て眞實自性の淵源に徹底して一切處に於て受用する
 底の氣力を得んとならば動中の工夫に越たる事は待るべからず茲に何
 百兩の黄金あらんを人をして守護せしんに室を閉扉を銷して其傍らに
 坐し守て人にも取れず奪れずとて中々氣力有んする者の手柄とも働と
 も申さるべき事にし非ず是を二乗聲聞の自了偏枯の修行に比す又一人
 有群盜蜂の如に起り凶黨蟻の如に馳廻らんす中をか金の持して何某
 の處まで贈り届けよと命せられたらんに彼男膽氣あつて大劍を挟み腰
 高く褰げかの金を取て棒頭に突掛け打傾て一交もせで彼所へ贈り届け
 て少しも恐るゝ氣色なくんば天晴甲斐くしき働き大丈夫の氣象と
 稱嘆すべき事なりこれを圓頓菩薩の上求菩提下化衆生の眞修に比す何
 百兩の黄金とは正念工夫堅固不退の大志と云ふ群盜蜂の如く凶黨蟻の

禪 學 譚

如しとは五蓋十纏五欲八邪の妄念を云り彼男は眞正參禪圓頓究竟の上
 士を云り何某の處とは常樂我淨の一德具足大寂彼岸の寶所を云り所以
 に言眞正參玄の衲子聲色堆裏に向て坐臥すべしと往々に古の二乗聲聞
 なりとして輕しむれども見道の力も智徳の光も今の世の人々の及へざ事
 にし侍らす只修行の趣向あしく空閑の處をのみ好みて都て菩薩の威儀
 を知す佛國土の因縁なき故に如來は疥癩野干の身に比し淨名は魚芽敗
 種の部類なりと呵責し玉ひき三祖大師の宣はく欲起二乗勿惡六
 塵と是又六塵を數奇好めどには非ず水鳥の水に入共少も翼の濕さる
 如く平生六塵の上に於て取す捨すして斷斷なく正念工夫相續せよとの
 心にて侍り若又一向に六塵を避入風を恐れば覺す二乗の日竈に墮して
 永く佛道を成せしとなり永嘉大師は在欲行禪知見力大裏生起終不

禪 學 譚

壤と宣ひき是亦五欲に耽着せよとの心には待す五欲六塵の上に在ても
 蓮の泥土に汚されざるが如く純一に受用せよとの心にて待り然るに山
 林野外に在て一食卯齋し六時行道とる人さへ道業純一になる事能はず
 況や夫婦昆弟の間に交り塵務紛然たる巷をや若それ見性の眼なくんは
 毫釐も相懸する事能はじ是故に達磨大師云若欲覓佛須是見性と若又忽
 ち諸法實相唯一乗の知見を開かば六塵即ち禪定五欲即ち一乗なるが
 故に語黙動靜常に禪定中なるべし若果して然らば彼山林に在て禪を行
 する底と得力香壤の間を隔てん火裏の蓮とは世間希有の行者なりと稱
 歎し玉ふに非ず永嘉は天台の三諦即一の堂奥に達し止観の修行は精
 く鍛錬し玉ひたれば傳中にも四威儀に常に禪觀に冥すと稱嘆したる程
 なれば片言隻字といへとも中々容易の事にし非ず四威儀に常に禪觀に

禪 學 經

冥すとは四儀即ち禪觀禪觀即ち四儀なるに冥合したる境界を云ふ彼菩
 薩は道場を起すして諸の威儀を現すと説たまひしと同一摸範なりとれ
 蓮は水中にさける華なる故に火邊に近付時は立處に枯涸事なり然れば
 火氣は蓮には上もなき敵藥ならずや然るに火裏よりさき出たらん蓮は
 烈火に向ふ程いよく色香を増て麗はしかるべし彼五欲を避嫌つて最
 初より修行したらん人は縦ひ我法の二空に通じ見道如何許り明かなり
 とも靜中を離れ動中に向ふ時は蜺蝦の水を失へるに等く獼猴の林樹を
 離れたるに似て半點の氣力無して左ながら水中の蓮の火氣に逢て忽ち
 凋枯するが如けん若又平生六塵の上に於て猛く精彩を著け純一無雜打
 成一片にして毫釐も錯らず彼何百兩の黄金を亂世の時贈り届けし人の
 如く甲斐なくしき氣象を押立て片時も間斷なく勵み進みたらんには忽

禪 學 經

ち自心の源底を掀翻生死の命根を踏斷して虚空消殞し鑄山摧る底の大
 歡喜あらん彼火裏よりさき出たる蓮華の火氣に逢て轉々色香を増が如
 げん何が故ぞ火氣即ち蓮華蓮華即ち火氣なる故に只返々も内觀眞修寔
 に放過すべからざる至要なり内觀の眞修とは吾此臍輪以下丹田氣海及
 び腰脚足心に總に是趙州の無字無字何の道理かあるこの臍輪以下丹田
 氣海及び腰脚足心總に是自己本來の面目面目の鼻孔何の處にかある吾
 此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾唯心の淨土淨土何の莊嚴か
 ある吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾己身の彌陀彌陀何の
 法をか説吾此輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾本分の家郷家郷何
 の消息かあると咳唾掉臂寤時寐男子たる者の思ひ立たる事を遂すや置
 べき仕果すやあるべきと決烈勇猛の大憤志を展つて問もなく進み給は

臍 輪 學

と平生の心意誠情すべて行れず腦襟分外に清涼に分外に皎潔にして萬
 里の層氷裏にあるが如く維ひ亂軍の場に入り歌舞遊宴の歌吹海に入ら
 雖ども人なき處に在か如く雲門大師の氣宇玉の如しと道底の大機は求
 ざるに煥發せん此時に當て諸佛衆生も是幻生死涅槃猶如昨夢天當地
 獄を徹見し佛界魔宮を鎮懾し佛祖の正眼を瞎却し恣に百千無量の法門
 微塵恒沙の妙義を説き宣一切の含識を利益し塵劫沙を経て退屈せず永
 劫大法施を行じて替て乏しき事なく空華の万行を展開し公響の度門を
 建立し臂に奪命の神符を掛け口に法窟の爪牙を咬嚼して十方參玄の衲
 子を惱害し釘を抜き楔を奪て毫釐も假事なく一箇半箇牙劍樹の如く口
 血盆に似たる底の凶惡無義の鈍瞎漢を打出して以て佛祖の深恩を報答
 す是を佛國土の因縁菩薩の威儀と云ふ是はこれ方夫に傑出する底の未

臍 輪 學

丈夫見生平の懷素なり彼寂靜の事の處に在て賊神を認得して見性なり
 と相心得楷歷淨盡して以て足りとする底の無眼禿奴の族は夢にも曾て
 見事を得んや是等の族は終日無爲を行して終日有爲を打し終日無作を
 行して終日有作を打す何か故そ見道分明ならず親しく法性の實際を窮
 さる故に惜へし再び得難き一生を盲龜の空谷に入が如く鬼の棺木を守
 るに似てやみく／＼と過了て苦しいかりし三塗の舊里へ懲もなく立歸らん
 事皆是進修の指南惡く見性本より眞ならざるか故に一生空しく心力を勞
 し盡して終に方寸の功を立る事能はず寔に憐むへし去程に時宗一遍上
 人の如きは鉦子を頸に打掛念佛しなから二度三塗に入ぬれば再びかへ
 る事となすと打泣く東は奥州出羽の果西は筑紫博多の浦の奥までも
 告廻り給ひけるか終に由良の開祖に見て往生の大事を決定し給ひける

學 學 學

とと寔に貴き芳隅ならずやつらく人界の始終を思ふに天上に生すへ
 きには福力足らず三塗に墮すへきには罪業足らず終に此娑婆穢土の生
 を感得すその中國王大臣長者居士等の人々は前生多少の善縁を修し許
 多の勝因を種來れども天上へ生すへきには福力足すして今大饒富貴の
 家に生れて臣妾を前後に従へ寶財を左右に束て何の辨もなく万民を憐
 むす士庶をも惠ます憍奢の心のみ多くて今日も惡業惡因明日も亦殺業
 苦種多少の福德を擔ひ來て徒に空華の榮耀をのみ極めて限もなき罪業
 に仕かへて擔もて果しもなき惡趣の巷へ立歸り玉ふは世間に限りもな
 き事に侍り只返すくも内觀の秘要を捨をか熟鍊是あれべし内觀の
 眞修は第一養生の秘術にしし仙人鍊丹の大事に契へりその初は金仙氏
 に起つて中頃天台の智者大師に至て摩訶止觀の中に精しく口授し玉へ

學 學 學

り吾壯年の頃をひ是を道士白幽先生に聞けり白幽は城州白川の巖窟に
 隠て聞壽齡二百四十歳を閱すと時の人は是を稱して白幽仙人と云故の丈
 山氏の師範なりと幽が言に曰く大凡生を養ふの術上部は常に清涼なら
 ん事を要し下部は常に温暖ならん事を要す須く知べし元氣をして下に
 充しむるは是生を養ふ至要なる事を往々に神丹は五行合て鍊と云事を
 のみ聞て水火木金土の五行は即ち耳眼鼻舌身の五根なる事を知す五根
 を聚て神丹を鍊とは如何なる事ぞとならば蓋五無漏の法あり眼妄りに
 見ず耳妄りに聞ず舌妄りに言ず身妄りに觸ず意妄りに思慮せざる時は
 混然たる本元の一氣湛然として目前に充是即ち彼孟軻の謂ゆる浩然の
 一氣なり是を引て臍輪氣海丹田の間に收て歲月を重ね是を守つて守一
 にし去り是を養つて無適にし去時覺へず丹竈を掀翻して内外中間八軌

神 學 譚

四維總に是一枚の大還丹自己即ち是天地に先つて生せず虚空に後れて
 死せざる底の長生久視の大神仙なる事を覺得せん茲に於て大洋を攪て
 醪醕となし厚土を變じて黄金とす是故一言還丹一粒點鐵成金と白玉
 醕曰養生之要先不若鍊形鍊形之妙在乎凝神神凝則氣聚則丹
 成丹成則形固形固則神全と須く知るべし丹は果して外物に非る事を益
 し地に玉田あり梁田あり玉田は珠玉を産するの地梁田は禾稼を成する
 の場人に氣海丹田あり氣海は元氣を收養ふの寶所丹田は神丹を精練し
 壽算を保護するの城府なり古云江海所以能為百谷王者以其善下
 之と滄海既に万水の下を占て百川を包容して増減なし氣海既に五内の
 下に居して真氣を收て飽事なし終に神丹を成就し仙都に入る丹田なる
 者一身三處吾謂ゆる丹田は下丹田なる者なり氣海丹田各々臍下に居す

神 學 譚

一實にして二名あるが如し丹田は臍下二寸氣海は寸半眞氣常に此内に充實して身心常に平坦なる時は世壽百歳を闔すと云ども鬢髮枯す齒牙動かす眼力うたへ鮮明にして皮膚次第に光澤あり是則ち元氣を養ひ得て神丹成熟したる効驗なり壽算限り有へからず但し修養の功の精麤如何に在らくのみ古の神醫は未だ病さる先を治すよく人をして心を攝め氣を養はしむ庸醫は是に反す已に病の後を見て針灸藥の三を以てこれを治せんとす救さるもの多し大凡精氣神の三の物は一身の柱礎なり至人は氣を惜んで使す蓋し生を養ふの術は國を守か如し神は君の如く精は臣の如く氣は民の如し夫その民を愛するは其國を全するゆゑなり其氣を惜むは其身を全するゆゑなり民散する時は國亡ふ氣竭る時は身死す此故に聖主は常に心を下に專にし庸主は常に心を上に恣にする

學 釋

上に恣にする時は九卿龍を待み百僚權に倣つて曾て民間の窮枯を顧る事なし歛臣貪り掠め酷吏僞り剣野に菜色多く國に餓季倒る賢良潛み竄れ臣氣曠り恨み終に民庶を塗炭にし國脈永く斷るに至る心を下に專にする時は常に民間の勞疲を忘る事なく民肥國強く令に違するの臣民なく境を侵の敵國なし人身も亦然り至人は常に心氣をして下に充しむ此故に七凶内に動事なく四邪外より侵す事能はず營衛充ち心神健かなり身終に針灸の痛痒を知らざる事強國の民の刃斗の聲を聞さるが如し岐伯昔し黃帝の問に答ふ恬淡虛無なれば眞氣これに従ふ精神内に守らは病安よりか來らんと今の人には此に反す生より死に至るまで主心片時も内を守る事なし主心とは何それの物と云事をさへ知らず無知なる事犬馬の日に足に任せて走るか如し危かな兵家に云すや驚悲妄りに起るは

學 釋

主心定らざる故なりと蓋し主心内に守る時は愛悲恐怖妄りに生ずる事
 なし若人片時も主心なき時は死人に如同す或は放辟邪侈至らすと云事
 なし譬へは茲に一箇の舊宅有んに衰朽疲困凍餒貧窶の老女たりと云と
 も主の有んする家へはゆへ無して他の人妄りに出入する事叶はず其家
 もし主人を失する時は賊盜も潛み休む乞兒も亦來り宿し狐兔競ひ走り
 狸貉竄れ睡る閑神晝さちひ野鬼夜吟す千妖百怪群邪の窟宅とならん人
 身も亦然り正念工夫の主心臍輪氣海の間に盤石などを淘居たるか如く
 凜然として主張する時は一點の妄念情量なく半點の思想と度なふして
 天地一指万物一馬厚重山の如く寛大海の如くなる底の一員の大丈夫佛
 祖も手を挟む事能はず魔外も窺ひ知事得す日々に万善を行して以て倦
 事なし謂つへし真正報恩底の佛子なりと其人忽ち邪境に奪はれ妄縁に

禪 學 障

引れて覺へず正念工夫の主心を打失す是を忽然念起名爲無明と云煩惱
 の邪魔障の如くに起り邪見の妖魅蟻の如くに競つて四大夢幻の廢舍五
 蘊空華の朽宅忽ち化して魔魅の住所となんぬ千態万狀日々に幾万種の
 生死そや外面は高蹈たる君子の風標あれども内心は夜叉の變態多きか
 如し心上げ鎮へに八島の合戦より苦しく胸中は常に九國の兵亂よりも
 煩はし恰も長者火宅の譬へに等し是を生死常没の業海と云若夫正念工
 夫の船筏精進の猛勇櫓帆なくんは賊浪情波の急流にをし浸されて臭烟
 毒霧の暗區を越得て四徳の彼岸に到る事を得んや悲哉人々如來の智慧
 徳相を具足して少も缺事なく箇々佛性の如意寶珠を圓備し鎮へに大光
 明を放つて娑婆即寂光の淨刹毘盧法性の眞土に住みなから慧眼すてに
 盲たる故に娑婆なりと見錯り衆生なりと思ひ違へて得難き人身逢難き

禪 學 障

一生を闇々と牛馬などの無時尋常なる如く何の辨もなく明かし暮して
 苦しかりし三途悲しかりし六趣の巷吟ひ遶りて少しも變遷あらざる舍
 那常寂の眞土を把へて地獄なりと恐れ迷ひ無間なりと泣き苦しむ是只
 上の常とるにも足らぬ斷無の小見に傲り片腹痛き少許の口耳の學解に
 傲て佛法を信せず聞かす虚口をのみ利て正念工夫の中心を片時も守る
 事なき人々のなれの果なり悲みても尙悲しむべきは流轉永劫の罪累恐
 れても尙恐るへきは生死長夜の苦果なり天下の三聖人なりと崇られせ
 さ給ふ延喜天曆の帝さへ焦熱の猛火に黒ませ給ふを笙が岩屋の日藏上
 人はまのあたりに見上りたりしに我は粟散小國の王たる事を待橋慢甚
 しかりし罪にて斯は成たるぞと宣けるとぞ敏行の朝臣は和漢の才に長
 じ手迹麗しくをばして法華經二百部まで書寫し給もたれども正念工夫

禪 學 禪

禪 學 禪

をわさゝりければ苦趣に墮して紀の友則の許に來りて救ひを乞給給ひ
 けるとぞ又本朝無雙の名將也と稱せられ給ひて目に餘りたる朝敵を從
 へ至尊の宸襟を休め奉り南都北京の貴僧高僧も加持しわぐみたりける
 天子の御惱を弓のすびさして絃音にて搔拭ひたる如く治し上りたる程
 の八幡殿さへ閻王の廳に跪き給も多田の滿仲は病中閻王の使に召れて
 冥府の有様を見了り蘇生し殊の外に恐怖し給て直ちに六角堂に入り入
 道し念佛し給ひける汗と涙と疊を打透しけるとぞ六國を并呑し四海を
 囊括して八蠻の外までも震ひ恐れたりける秦の莊襄王も鬼趣に墮して
 苦を受け周の武帝は鐵梁の責を受け梟雄天下に聞へたりける秦の白起
 は糞泥獄に沈みて後明の洪武の始吳山の三孝觀なる處に於て電白と蟻
 蛭の長け尺餘なるを震殺しけるに背に白起と云る文字ありくと記し

さ由罪業の空に難き事知ぬべし諸事なかれ塵務繁絮にして参禪に暇な
く世事纏紛として工夫續き難しと須く知へし真正参禪の衲子の前には
塵務なく世事さな是を譬へは茲に一人あらんに往來絡繹たる巷稠人廣
衆の中に於て錯つて二三片の金子を遺落したらんに人目しけしとて棄
てや置へき物騒しとて尋ねすやあるへき多の人々を押わけかいくつ
ても一回尋ね出して我手に入さらん限りは心頭休罷する事能はし然ら
は則ち塵務繁しとて参禪を怠り世事煩はしとて工夫を廢せん人々は諸
佛無上の妙道を以て彼兩三片の黄金程には貴ひ惜まざる者に非すや塵
務の上世波の間に於て彼黄金を遺落したりし人の如く專一に究明した
らんには誰か歡喜の眉を開かさらんや此故に妙超大師云見るやいかに
加茂のさをひの駒くらへかけつかへすも座禪なりけりと眞珠菴主は此

禪 學 禪

意を述して看經すへからす座禪すへし掃地すへからす座禪すへし茶の
實種へからす座禪すへし馬に乗へからす座禪すへしとこれは是眞正参
禪底の古實なり吾正受老人常に云不斷座禪を學はん人は殺害刀杖の巷
號哭悲泣の室相撲掉戲の塲管絃歌舞の席に入ても安排を加へず計較を
添へず束ねて一則の話題と作て一氣に進んで退かず譬へは阿修羅大力
鬼に肘臂を捉られて三千大千世界を遶る事千回百匝すと云とも正念工
夫片時も打失せず相續不斷なる是を名て眞正参禪の衲子とす十二時中
只面皮を冷却し眼睛を瞪却して毫釐も人情を交へされど寔に貴ふへし
兵法にも亦云すや且戰且耕是万全之良策也参學もまた爾より工夫は且戰
ふの眞修内觀は且耕の至要鳥の雙翼の如く車の兩輪の如し内觀の秘訣
は予向に江湖参玄の衲子の爲に夜船閑話に書し了れば予常に此等の趣

禪 學 禪

を以て衲子の禪病を救ふ事幾人と云敷を知らず中に就て重症必死に向
 とする者八九を治す學者必ず内觀と參學と共に合せ並へ貯へて以て生
 平の本志を成せ上學道の人縦ひ參じて五派七流の大事を究得るとも若
 夫れ短壽ならばか何の用を成に堪んや縦ひ又内觀の力に依て彭祖が八
 百の歳時を閱すと云ども若夫れ見性の眼無んば唯は一箇老犬の守屍鬼
 何の好事かあらん若又枯坐默照を以て足りとせば枉て一生を錯り大ひ
 に佛道に違せん只佛道に違するのみに非ず大に世諦もまた廢せん何が
 故ぞ若大諸侯大夫は朝勤を怠り國務を廢して枯坐默照し武夫は射御を
 疎にし武術を忘れて枯坐默照し商賈は戸店を鎖し算盤を碎て枯坐默照
 し農夫夫は犁鋤を擲ら耕耘を止て枯坐默照し工匠は繩墨を捨斧斤を抛
 て枯坐默照せば國衰へ民疲れ賊盜頻りに起つて國を危からんか然ら

禪 學 譯

は則ち衆民瞋り恨て必ず云ん禪は窮て不祥の大兆なりと殊に知す古へ
 禪林の盛なりし時南嶽馬祖百丈黃檗臨濟歸宗麻谷興化盤山九峰地藏等
 の諸聖拽石搬土水澆菜蔬作務普請の鼓を鳴して専ら動中の得力を求む
 此故に百丈大師曰一日不作一日不食是を動中の工夫不斷坐禪と云此
 風近代地を拂つて盡蓋し斯いへばとて坐禪を嫌ひ靜慮を誇るにし非ず
 大凡一切の賢聖古今の智者禪定に依ずして佛道を成就する底半箇も亦
 無し夫戒定慧の三要は佛道萬古の大綱なり誰か敢て輕忽せんや然るに
 向に轉ゆる禪門の諸聖の如は超宗越格真正無上の大禪定擬議するどき
 は則ち電轉じ星飛ぶ羝羊の眼狐狸の智如何を敢て窺知る事を得ん縦ひ
 又默照枯坐して立地に成佛し立地に大光明を放つ底の好事ありとも諸
 侯大夫士庶民家萬般の公務千般の家事ある何の暇あつてか片時も打坐

禪 學 譯

する事を得んや此に於て病と稱して公務を擯れ家業を廢して三五七廿
 一室を閉戸牖を鎖して幾枚の團蒲を重ね一枚の香を挾んで坐すと云と
 も平生の塵務に疲れて一寸坐すれば一丈睡り三合の坐禪には千万斛の
 妄想を集む既にして眼を瞪り牙を咬み拳を握り梁骨を堅超して坐すれ
 ば萬般の邪地頭を鏡つて生す越て頰を攢め眉を皺めて覺へず悲泣して
 曰官途道業を妨げ仕路禪定を障ふしかじ官と辭し印を解て水邊林下寂
 寞無人の處に在て恣に禪觀を修し永劫の苦輪を遁んと大に錯り擧り大
 凡人の臣たるの道は主君の飯を喫して主君の衣を纏主君の帶を結で主
 君の刀を帶水も亦他處より擔ひ來るに非ず耕すして食ひ織すして纏ひ
 身體手足髮毛爪齒總に是君恩の所成なり恁麼にして成長し來て三四十
 歳に至て主君の政事を助け専ら王佐の才を抽で君を堯舜の君にして民

禪 學 譯

を堯舜民にし専ら君恩に報答すべき時到て袖裏に密に念珠をつまぐり
 口頭幽に佛號を唱へて出仕に懶く公務を怠り方寸の君恩に報答すべき
 心もなくして動もすれば病と稱して退んとす恁麼の志行にして縱ひ三年
 五歳陰僻の處に在て精鍊刻苦し思想盡き情念止に似たりと云ども肝膽
 傷み悴け心上常に恐怖多く鼠糞の落るを聞ても胸間裂るが如し大將に
 も諸卒にも何の專途にか立べき萬一國家の大事あらんにかゝる人々を
 引て一虎口の門戸を堅めたらんに敵軍潮の如に湧き旌旗雲の如に覆ひ
 火炮は雷の落かゝるが如く響きわたり貝鐘は山も崩るゝ許り轟き鳴り
 戈戟は氷の如く拔連たるを見聞ば飲食咽に入ず混震にふるへて手綱と
 る事さへ叶はで駭つばにすがり平て動もすれば自ら震ひ落んとす果は
 歩兵の爲に獲らる何が故ぞ斯の如くなる只是三年五歳寂黙枯坐の致す

禪 學 譯

所なり羅ひ熊谷平山などが如き勇士也とも斯の如く修行したらんには
 豈に震へざらめや此故に祖師大悲善巧有てこの正念工夫不斷坐禪の正
 路を指す諸侯は朝覲國務の上士人は射御數の上農民は耕耘犁鋤の上工
 匠は繩墨斧斤の上女子は紡績機織の上若是正念工夫あらば直に是諸聖
 の大禪定此故に經に曰資生產業皆與_二實相_一不_二相違背_一と若夫れ正念工
 夫無んば老狸の空穴に睡るが如けん悲むべし此道今人棄て土の如くな
 る事を往々に我法二空の黒闇谷を認得て向上最上の禪なりとして日々
 眉を皺め頰を攢て死盪の藪中に在か如くは祖庭は遙に雲煙を隔つ佛教
 を嫌ふ事跛鼠の猫兒を避るか如く祖錄を忌むこと瞎鬼の虎聲を聞に似
 たり殊に知らず此は是二乗常没の舊窠相似の涅槃なる事を此故に宗峰
 大師曰三年までわれも狐の穴にすむ今はかさるゝ人も理り悲歎し給
 ひき去程に肇公は此を困魚止_レ宿病鳥栖_レ慮少_ク安事を知て大に安事を

禪 學 碑

禪 學 碑

知すと呵し給き真正參玄の上士は入理の淺深如何ん見道の精麗如何ん
 に在らくのみ誰か稱か在家出家を擇ばん誰か隱か朝市山林を論せん古
 への相國公美大夫陸亘尙書陳操都尉李公楊公大年張公無盡等の諸君子
 の如きは見性わが掌上を見るが如く參玄わが肺腑より出るが如し佛海
 の深源底を蹈翻し禪河の毒波浪を並吞す智鑑高明職量寛大閑神恐れ走
 り野鬼悲み潜む各朝廷の政事を助けて天下を泰山の安きにをく誰かそ
 の堂奥を見ん張公の如きは官宰輔にのほり位人臣の頂を極む王佐の才
 豊にして君信と臣貴み士敬し民懐く天膏雨を下し君淋字を賜ふ壽と百
 齡に近ふして澤を四海に流へ民堯年の秋に傲り人舜日の暄を負ふ上君
 恩に報答し傍ら法寶を鎮護す寔に天下の人傑なり此故に言在家_レ成道
 張無盡食_レ蘇_レ究_レ禪楊大年と實に千歳の美談ならずや蘇内翰黃魯直張子

成張天樂郭功甫等其餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸君子豈にそれ際
 限あらんや見道各々林下の人に超過す常に万機の政務を佐け肩を万國
 の衣冠に交へて銀魚金龜の朱紫貴海中に立禮樂射御の間を進退揖讓の
 席に臨て片時も道情を打失する事なく遂に祖庭の玄微に徹證す是皆正
 念工夫不斷坐禪の變驗ならずや佛道微妙の深恩ならずや祖庭孤危の威
 德ならずや彼默照枯座を足りとし心源靜寂を禪なりとして丘壑に餓死
 する底の類と寔に霄壤の間なりこれ謂ゆる尖兎を得ざるのみに非ず鷹
 子も亦打失する者に非すや何か故を徒に見性する事能はざるのみに非
 す主恩も亦廢す太た憐むべし寔に知る得力の淺深は進趣の當否に依る
 事を工夫若し一人と万人と戦ふ底の氣力あらは豈にそれ林下と室家と
 を擇はんや若し見道は特り林下の人のみに在といはば民の父母たる

禪 學 事

と人の臣たる人の子たるとは望を其間に絶んか縦ひ林下に在とも道
 業密ならず志念純ならずんば何ぞ室家に異ならん縦ひ又室家に在とも
 志願濃厚に操履堅實ならは何ぞ林下に異ならんや此故に言思ひ入る心
 の中に道しあらはよしや芳野の山ならずともと只兎にも角にも諸大將
 の心かけ給はしする座禪は此正念工夫の不斷座禪に超へたる事は侍る
 へからず此は是二百年來廢れ果たる古實にて侍り何をか正念工夫と云
 そとならば咳唾掉臂動靜云爲吉凶榮辱得失是非東ぬて一則の話頭とな
 して臍輪氣海丹田の下に鐵石の如くに突居へ本尊には即ち大樹君諸侯
 大夫は吾同業影向の諸菩薩衆近習外様の大小の諸臣は吾か舍利弗目連
 等の二乗の大弟子衆士庶万民は吾か赤子の如くなる所化の衆生なると
 思はして専ら仁恕の心これあるへし袴肩衣は直に是七條九條の衲法衣

禪 學 事

兩口の打物は禪板机案馬鞍は一枚の座蒲團山河大地は一箇の大禪床上
 下四維十方法界は目已本有の大禪窟陰陽造化は二時の粥飯天堂獄淨刹
 穢土總に是吾か脾胃肝膽樂府内外三百疊は朝夕の看教誦經千百億の須
 彌山を束ねて以て一片の脊梁骨とし其餘の進退揖讓射御書數皆是菩薩
 万善同歸の妙行なりと觀念し大勇猛の信心を抽て彼内觀の眞修に和し
 て起居動靜の間に於て那時か是打失の處那時か是不打失の處と時々
 點檢する是古今の聖賢賢修の正路にて侍り去程に子思子も道は須臾
 離もべからず離るべきは道に非すと宣ひさ魯論里仁の篇には造次必於
 是顛沛必於是とは片時も打失する事なかれども教にて侍り此道とは
 中庸の正道を云り正道とは斯經難持若暫持者我即歡喜諸佛亦然と説給
 ひたる法華經の事にて侍り法華經とは即ち正念工夫の大事を云り工夫

禪 學 譯

とは自己本有の有縁を指事なると覺悟これ有べし生死の大事を透脱し
 佛祖の正眼を瞎却する底の眞實見性の正修にて侍れば中々容易の事に
 じ侍らず只肝心は動靜二境の間遊順縱横の上に於て純一無雜打成一片
 の眞理現前して千人万人の中に在ても万里の曠野に獨立したる心地あ
 つて彼庸老が謂ゆる雙耳如響眼如盲なる境界は時々此あるべし是
 を眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り此時退かす動も進み給はゞ氷
 盤を擲摧するが如く玉樓を推倒するに似て四十年來未だ嘗て見ず未だ
 嘗て聞ざる底の大歡喜あらん若人自家見性の眞偽如何ん得力の精麁如
 何を知んと欲せば先須らく謹んで傳大士の偈を見るへし何が故ぞ未透
 底の士は句に參せんより意に參すべし己透底の士は意に參せんより句
 に參すべし偈に曰く空手把三脚頭二步行騎二水牛一人從三橋上過橋流水不

禪 學 譯

流文曰燈籠院入露柱佛殿走出山門又懷州牛喫禾益州馬腹脹又張
 公喫酒季公醉飲知端的北斗向南看寒山子的偈是青山白浪起井底
 紅塵颯若人見性分明なる事を得ば此等の言句は吾掌上を見る如けん
 若然らずんば言事なけれ見性したりと縦ひ又如上の言句は於て逐一分
 明に見得徹したりとも足りと解る事なけれ棄去て者疎山壽塔の因縁南
 泉遷化の語乾峰三種の病五祖牛窓燈の話宗峰大師回朝結眉夕交肩我
 何似又本有團成國師曰栢樹子語有賊之機此等の話頭葛藤も疑ひ無事
 を得ば須らく知べし見處佛祖と同一摸範なる事を参玄の上士と稱して
 何の愧る處かあらん何か故と参禪は各誓つて佛祖の心を明めん事を要
 す若夫佛祖の心を明らめ得ば豈に夫佛祖の語話を明らめさらんや若夫
 未だ佛祖の語話を明らめ得ずんば須らく知るべし未だ曾て佛祖の心を

禪 學 禪

明らめ得ざる事を此故は七賢女經曰佛言我弟子大阿羅漢不能解此
 義一唯有大菩薩衆一應解此義とは何とや西天此土祖々相傳し
 來る底の向上の秘訣なり此義を下知せしめんか爲に此難透の語頭を留
 ひ此故に眞珠菴主有偈曰天台五百阿羅漢身著法衣出人間神通妙
 用可還汝佛祖不傳妙難々菴主は即ち息耕東海七世の孫にして其知見
 斯の如く愉快なり貴ふへし此時眞風尙未だ落さりし事を今時奴郎辨せ
 す玉石分たさる底の無眼禿奴の部屬往々に言自心即ち是佛は話頭了し
 て何かせん心淨ければ淨土淨し語縁を聞して何の用と此等の類を未
 得證得未證謂證無漸昏愚の外道とす竊かに彼が心と稱する所以の者を
 見れば八識頼耶愚癡無明の闇窟なり錯々賊を認て字となし錯を以て錯
 に傳へて祖々傳來の妙道なりとし人の參禪學道艱辛清苦するを見せば

彼と彼とは圓頓の直指を知す二乗の根性なりそれとそれとは向上の禪を會せず聲聞の部類なりと彼か謂ゆる圓頓の直指點檢し見來れば楞嚴に呵し給ふ無明元本なり彼二乘聲聞の人々には霄壤迥かに劣れり而して逮得已利の賢聖を捉て妄りに輕賤す寔に笑つへし或は又一般あり難の字にもせよ栢樹子にもせよ一向に手脚の着さる處を禪道なりと妄想して以て透過とす此は是一等の惡風俗膏盲難治の大禪病錯を以て錯に就く底の不救の傳屍病總にこれ妄分別真正參學の上士の如きは則ち然らず參し參して參すへき無き處に到つて理盡き詞は究まつて技も亦究まり天涯に手を撒して絶後に再び蘇つて而して後に圍地一下の安堵は得る事に侍り左もなくして無明妄想生滅の心行を以て難透難解の秘訣換骨奪命の大事を彼此沙汰致し侍らんは恐ろしき事なり佛も生滅の心行

禪 學 庫

禪 學 庫

を以て實相の法を說事なかれと堅く制し給ひたるを以て正受老漢は常々眉を皺められ侍り然に雲水往來の僧侶十が八九大口を開ひて傳燈千七百箇の大事に於て毫釐も疑ひは侍らぬなど、會釋もなく云散す底多し試に一則を擧揚すれば拳頭を豎るあり一喝を吐くあり十が八九は疊を扣く者多し輕々に接着すれば見性は存じも依ず學文の功さへ無くして一文不通頑陋無眼の人々なり斯恐ろしき無頼不敵の働さは何れの知識の許より習ひ持ち來るやらん去程に三五年も斯くわめさあるくよと思へは天竺へ渡りたるか唐へ行たるか蔣に成たるか菴になりたるか果は音も臭もなく成行は幾等と云數を知らず蟲齒の藥にも成らざる底の悟りを惜むへし棟梁の質あつて神俊の才を具足し參玄力を盡し琢磨功を重ねば佗後馬祖石頭にし去り臨濟德山にし去て天下の蔭涼樹とも成

禪 學 雜

り去るべき底の人々苗にして秀んとする肝心の時節筋なき妄解を習ひ
 来て人の參禪學道精神盡すを見ては馳求の心止まず云て地空を拒絶して
 て大笑す爾が頑空物無記賴耶の暗窟を認め得て歇得する底の精見解三
 日五日眉を皺めば驅鳥の童子も亦須く解すべし況や他人の處より習ひ
 持來らんをや佛祖も手に餘したる者に成て初は信する人間も是れも
 元來無記暗鈍の瞎凡夫次第に在家實頭の人々にだも及ばず果は檀那施
 主にも忌嫌はれ行方知す成り行は近年行脚の風俗なる如何がして真正
 の得悟は得る事ぞとならば塵務繁絮世事紛然七顛八倒の上に於て譬へ
 ば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に匹馬單鎗大勇猛の精神を震つて
 一方を突き破つてかけ抜んず時の心持にて正念工夫絶すもなくなり精彩
 を着け手脚の下すべき機もなく四面空洞として心身ともに消失せたる

禪 學 雜

心地は時々これ有者に待り此時恐怖を生せず勵み進み待れば一旦の
 得力は間もなく豁然たる者に待り總して參學は妄念情量と戦ひ昏沈睡
 魔と戦ひ動靜違順と戦ひ是非憎愛と戦ひ一切の塵境と相戦ひ正念工夫
 を推立もて行張合にて不慮の省覺はこれ有事に待り彼勇施菩薩の如き
 は大重禁を犯して懺悔すべきに地なし徒に憂悲惱亂す忽ち自ら大誓を
 發して憂惱と戦つて默座す忽然として無生を悟る雲門大師は老陸州に
 左脚を過折せられて大悟し蒙山の異禪師は痢疾を患ること晝夜百次身
 體苦しみ疲れて前面只死あるのみ此に於て大誓願を起し苦痛と戦つて
 死座す少焉腸大に鳴動する事數回疾疾は拭ふか如く平癒して大に得所
 あり大圓寶鑑國師の如きは華園に入て聖澤の庸山老師に謁して所見を
 濱山漫罵して打て追出す師憤然として煩暑の日竹林の中に入て寸絲か

けす裸形にして枯座す夜に入て敷子百万鏡ひ來つて身上に集り圍んで
師の肌を咬む此に於て疔痒と戦つて齒を切り拳を握つて癡座す正氣を
打失せんとする者殆んど數次圖らす豁然として契悟す昔し調御世尊は
雪山に在て苦修六年皮骨連立蘆芽膝を穿つて臂に至り慧可大師は臂を
斷つて目の本源に徹し玄沙は泣々象骨を下つて厥蹟して左脚を破つて
散骨徹髓し臨濟は痛棒を喫して破家散宅すこれ古今の榜樣なり三世古
今の間に見性せざるの佛祖なく見性せざるの賢聖なし今時の如く徒に
空く胸臆の凡解を持って自己脚眼下の大事を了簡分別して以て足れり
とせば一生妄想の魔網を破る事能はし小智は菩提の妨とは此等の輩に
侍り中古禪門の盛んなりし時正念工夫心掛け給ひし士大夫は公より退
るの閑暇の日は如何にも健かなる士卒七八箇を従へ大馬に跨つて兩國

淺草などに等しき人立多る所を用存けに馳せ廻り給ひける由是は動中
の工夫親疎如何得失如何を矯し試ん爲なりける由去程に燈川新右衛門
は鬪靜喧嘩の席に望みて大省力を得太田道親は陣中に在て組布れなか
ら和歌を詠し正受老漢は其里へ狼の數限もなく來り集つて體をせし
時に所々の墓原に七夜まで坐し明したりと是は彼等に頸筋耳の根など
吹臭れんする時に正念工夫相續間斷ありや否やを矯し試みん爲なりと
申されき書寫の性空上人は常に悲歎し給ひけるは世念濃厚なれば道念
輕微なり道念濃厚なれば世念輕微なりと宣ひきつらく思ふに果しも
なく管々しき繰言披見も六箇布思すべき者を世念濃厚に書續けたるに
似たれども鳩林半死の殘喘長庚曉月顧みなき命に何の不足の處有てか
尾を揺かして憐みを乞ふや寵遇と權勢の門に栽るにし非す聲名を世波

の底に釣るにし侍らす是を序に人々の道情をも助けよがし法門無量誓願學と申す事の侍れは老居の人々の他後法施の一助ともなれかし且千兵は得易く一將は求め難しと申す事も侍れば書中少にても取べき處もつて幕下の道情をも助け増て禪學成熟し給は、其餘波必ず左右の人々に及ばん左右若其恩波に浴せば其澤必ず一城の人々に及ばん一城若その恩波に浴せば其澤必一國の人々に及ばん何か故ぞ一人の心は千万人の心なる故に終に天下國家に及ばし上王化を佐け下庶民を利せん然らば則ち宇宙の間那箇の盛事か是に如んやこれ老僧が生平の微志なり若然らすんば何の追従にか終夜孤燈を挑げ老眼を摩挐して果しもなき問す語りを繰返し、書送り侍るべきや道理ある事に思さば捨置す熟讀し給ひて内觀養生の秘術に契ひ給ひ心身共に壯健にして速かに參禪得

禪學

力圏一下の歡喜とも得給へがし次に願くは此内觀の加被力に依て武内の宿禰浦嶋子長壽をも保ち給ひ天下の政事をも輔けて万民を憐撫し内法寶を衛護し飽迄法喜禪悅の樂を究めて法成就にも至り給へがしと思ふ許りの寸志にて侍り老夫壯年より思ひ付侍りけるは正念工夫の勝手には武士の身の上程よき事は有べからず武士は明け暮れに身を懦弱に持事叶す出仕にも附合にも如何にも嚴重なる者なれば髮結立て上下か又は袴羽織にて大小手挟み折目高なる起居の上には正念工夫は溢れ建るゝ程潔よく打見ゆ増てよき駿馬の太く逞きに打騎て百万騎の敵軍をも人無き處を通る如く乗破り、驅崩すべし顔色は天晴見事なる不斷坐禪かく工夫しもて行たらんには出家は一年にて得力これあらは武士は一月出家は百日にて得力是あらは武士は三日にも利運は開かるべ

禪學

き者を志なく案内知り給はぬ故池月磨墨とも云べき大馬の背上に闇々
 と八石五斗無明妄想の重荷を建々積載ていかめしげなる貞曲してあた
 りを拂つて乗連々打通り給ふは近頃以て残念なる風情ならずやかく大
 切なる場所をば遣過して我々は仕官の身なれば坐禪などする暇隙は勤
 めの内は存じも寄ぬ事なるぞなど宣ふ人々は海中に在乍ら水を尋ぬる
 心地こそすれ四十二章經には人に二十の難あり豪貴學道難と誠なる
 哉王侯なり庶人に至るまで榮耀富貴の人々は數限りも無事に侍れど來
 生の苦輪を恐れ出離の要道を尋ね求むる人々は世界を一掃して一人も
 見侍らす是定めて金口の所説に違はじとの心なるべし只た富貴の上に
 も富貴を貪ぼりて足る事と知ず榮耀の上にも榮耀を求めて飽事もなき
 世の中に何の善縁ぞや幕下のみ獨り富貴を見る事空華の如く榮耀を見
 る事夢幻に等しく常に無上の大道に賢慮を傾け予卹慮を顧み給ふ事既

學 界

に三次昔し照烈の武侯が卹慮を顧み給ひしに等し彼れは三國を併さん
 事を圖り此れは三界を越ん事を求むその趣は同じといへも志は大に異
 なり昔し武侯は勳を棄命を委ねて以て三顧に答ふ老僧豈に三顧に報す
 るに片言を惜まんや如何なる法理を書贈りてか幕下勇猛の精神を増長
 し圖らすも宗門向上の大事を透過し怡悦の眉を開き給へかしと祈る許
 りにかなはぬ文章にて斯まで書續けたるにて侍り去なから宗門向上の
 大事は中々文字語言の力にても誘引すへ事にし侍らす然れども修行
 の趣向錯まり給はすは自然に大事に契當し給はてやあるへ事專使一昨
 鳥急に回鞭を執る貴答を裁するに暇あらず頻りに廢禮の緩怠を恐る幸
 にして昨日宜願盧原に歸る事を告歡踊に堪へす押へ留めて郵酬を修す
 睡らざる者一夜晩陰より書して天明に至れば醜書既に五百行を得ると

學 界

いへども酒情實を盡す事能はず老來暗記の力無ふして前に書しけるを
 後又書し始め演けるを終りに亦演字々烏焉多く行々魯魚の差いあれど
 も再看するに暇あらず裁封して以て額か歸袖に附す恰かも楚鷄を籠て
 丹山の鳳なりと稱して王侯に進むる者に似たり電照の後請ふ丙丁童興
 へて彼れをして秘重せしめ給へ若又書中取るへき處あらは再たひ清書
 して以て進獻せん幕下書記の人々に命して繕寫三五冊年少穎發の近習
 三五輩及び和田國堅か輩らに分ち與へて時々熟讀せしめ閑暇の日は
 幕下の股肱堤中澤の人々及び故老の舊臣良醫六七輩を召され圍み座し
 て聽受せしめ幕下も亦蒲團上に且つ聽且つ睡つて道情を保養し給ひ半
 日の餘閑を樂み給は、法喜禪悅の境致自然に現前して四王初利の歡樂
 夜摩兜率の勝界も亦羨むに足らず況や世間穢濁充滿の晏會輕浮傲奢の

學 碑

逸遊八音耳を蕩かし万舞眼を昏す底の無慚無愧の幻戲をや豈に顧るに
 足んや此趣を以て能や勘辨これ有て近習をも外様をて我八万の大衆を
 りと思はして密々に誘引し給は、いつしか上求菩提下化衆生の本願に
 契つて塵中衣冠希有の善知識誰か知ん劍を帶し鞍馬に跨つて往來しな
 がら時々諸佛無上の法輪を轉し給はんとは然らば則ち強將下に弱兵
 なしと申す事の侍れば龜氏慶善身子滿慈等の有力の武臣は野村田村等
 の人々を初め旗下には幾人も出來侍るべし万々天下の事故あらんに大
 將も諸卒も通身一團の真元氣百騎を卒して万騎に對すといへども從來
 生ある事を見ず豈にそれ死あるべけんや恰も鐵石を突立て行が如し靜
 なる事山嶽の如く疾き事颯風の如し向ふ處破らすと云事なく觸る處碎
 かすと云事なし譬へは保元平治の亂軍中に在とも無人の曠野に立が如

學 碑

けんそれこれ之を眞の丈夫の志氣と云君恩と法恩と並べ流で士卒を撫
す誰か幕下の爲に身命を惜まんや生死の恐るべき無れば涅槃の求むべ
きなし十方を目前に消融し三世を一子念すに貫通す皆是れかの正念工
夫の力らに依れり斯の如なる時は士散し民懷き君仁に臣正し農に餘の
粟あり婦に餘の布あつて上下ともく道と好んで國脈泰山の安きが如
く万世を経て衰減なけん然ば則ち人間天上の善果これは如べからず宰
官身得度者即宰官身の大士は豈にそれ異人ならんや穴賢

贈ニ于遠方之病僧一書

便の度毎に貴書並に傳語者回歛禪人便に又々芳書殊更野外珍らしき水
沈一封親切の至りに候貴兄事貴境工飛錫致され候も吾等勤め申し侍れ
は何と云道業怠慢なく園地一下の歡喜をも得られよかしと好便が待入

候處に夏頃止り氣分悪く今程延壽堂に入れ候旨且夕案し暮し候者回歛
禪人物語りには左程の事にもこれなく發足の二三日已前に入堂致され
候由如何計り嬉しく存し候氣分は如何様の重病沈痾なりともそれは世間
に打任て自分は随分正念工夫肝要と心かけこれあるへく候病中苦患の
間に仕扱たる修行は他後如何様の逆縁に逢ても退憎これなき物の由承
はり及び侍り大切の時節と思して努々油断これある間布候三十年前
去る老漢病中の僧に對して物語りせられけるは世に智慧ある人の病中
はと淺猿しく物苦き事はなき事なるとや智慧ある儘に來方ゆく末の事
とも際限もなく思ひ續け看病の人の好惡を咎め舊職同伴の間闊を根み
生前には名聞のとけざるを愁ひ死後は長夜の苦患を恐れ郷里を思ひて
は羽翰の生せざるを憤り神明に祈りては感應のをとを願ひ目を打塞

さて臥居たるは殊勝に物静かなれども胸中は九國の合戦よりも騒しく
 心は三途の衆生よりも苦し三合の病に八石五斗の物思ひなるへしか
 く病狂れ死したらんには後の世の有様こそ推量らるれ物思ひして薬に
 も養生にもなるためしならば吾々も打より手傳ひて物思ひ得させんな
 れども痛く物思へは心火逆らひ上り肺金痛み費へ水分枯渴し寒熱止事
 なく自盜の二汗は次第に繁くて果は命根も亦保ら難きに至る是皆平生
 の志行懶惰にして少し許りの病を妄想心の手傳ひて夥しくとだて上た
 るものなり然れば病に害せられたるにはあらず妄念に喰殺されたるな
 るべし寔に妄念は虎狼より恐ろしきものなり虎狼は戸牖さしたる内ね
 は入事は叶はぬものなり妄念の根は坐禪靜慮の床の上七條九條の袈裟
 の中ね亂れ入奴なり或る病人ははろ／＼と打泣て吾等程薄福なれ者

釋 學 釋

はなきそと上偶に受難さ人身を受け貴さ僧形を得ながら辨道の功をも
 積す辨道の光をも見ずして朽果んずる事の口惜さよなど泣口説たるは
 殊勝に愛らしけれども是も懈怠油断の大不覺者のなれの果なるべし大
 凡辨道工夫の爲には病中程よき事はこれ有べからず古來賢達の人々の
 巖谷に身をよせ深山に形を隠し給ふ事は世縁を遠さけ塵務を捨離れて
 道業純一にはげみ勤んが爲なり然るに病中を除ひて別の山谷なく病中
 を去て外の深山はあるべからず病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ使僧
 知客の應對も省き廣衆雜話の喧噴もをく僧堂の治亂を知らず常住の豐
 儉を見ず死活は天運に投かけ饑寒は看病の人に打任せて只狗猫など惱
 伏たる體にて何の合點もなく何の寸簡もなく只一向に蒲團上の事を忘
 却せず自己の正念を打失せざるを第一として生も夢幻死も亦夢幻天堂

釋 學 釋

地獄穢土淨刹悉く拋擲下して一念未興已前万不到の處に向つて是何の道理とぞ時々點檢して正念正夫の相續を肝心とせばいつしか生死の境を打越悟迷の際を超出して金剛不壞の正體を成就せん事これ眞箇不老不死の神仙ならずや人界に出生したる思も出ならずや圓順方袍の威徳ならずや佛道徽の靈驗なほらずや眞正參禪の人の前には吉凶榮辱逆縁順縁盡く道業を助る糧となり懈怠惰弱の人の前には假初の塵事芥子許りの病氣も夥しき障りに仕なして果は宿業のわさなり般若に縁こそなけれなど種々の道理をつけて遠からぬ般若を遠ざけ根もなき業障を種とたてゝ一生を錯る程の苦々しく情なき事はなきぞとよ古來より重病を受なから疑團打破の人々は間多き事なるぞかし中比去老和尙の重き腫物を受給ひて背後は爛冬瓜の如く腫がゆて目ももてられぬ痛惱な

禪 學 譯

禪 學 譯

りけるに湯藥食事進め參らするより外は人をも近つけ給はで目を打塞ぎて惱み伏し給ひけるにある時法眷の人々兩三靈見來りて見問上りける處の外療の人來りて土肉とらんとて膏藥に藥加へ參らせられたれば今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍りぬらんかゝる貴き御身に心なき腫物の出來りき日數多く惱ませたる御いとをしさ上去にても今日上りは愈肉の上りて目出度快氣をしまさん待奉る許りなるぞやとて憊勞り申ければ上人は濃く寝入たる人の目打覺たる御良はせにて人々はよくこそ見來り給ひもの哉包みはつべき事ならねば物語して聞せ申すべきを誰々も近寄給ひてよ扱も此度の病惱は愚老が爲には貴き善知識なるをや腫物の蔭にて二十年の非ををしり四十年の素懷を遂たる事の悔しきよ重病受ざりし已前は悟りに事欠たる事も無き行に不足もなき境界なりと

思ひて修行も打捨臆工面もなく供養など受け會釋もなく起居振舞けるが思はずもかゝる重病に沈みて五體も煎りあぐるが如く骨節も碎け離る、許りなれば氣遠く心塞りて黒繩衆合焦熱叫喚の苦患を纒に形體に集め上せたる心持にて悟りも見解も何地へや行きぬらん半點の力らをも得ずして残るものにては想念と苦痛とのみなりければあな口惜しかく惱み苦み死したればとて誰恨むべき事にしも非す逆も助かるまじき命なるに是れより正念工夫に取掛りて苦惱や勝べき工夫や勝べき心の長の及ばん程は責戦はんすものと思ひ定めて傑烈の大志を憤起し勇猛にはけみ進けるに一度も二度も苦しく絶へ入る心地しけるか打返し取直して間斷もなく進みける程にいつしか戦ひ勝て晝夜のさかひもなく寐寤の隔もなく終には打成一片の工夫現前して此十四日以来は想

學 碑

念も苦惱も雲霧などのはれ失たる心持にて大安樂なるのみに非す真正生死不二佛魔同體の眞理に契當し唯一乘金剛不壞の奧義に徹底したるところかし今日より後は如何様の逆縁重障なりとも菩提を妨ぐる事はあらしと覺ゆる人々も少し許りの會處得力あらんと頼み給ひて茲はの時に至つて愚老などか如く興さまし給ひて返々も健かならん時に正念工夫怠り給ふへからず賢くも煩ひける事上簡程目出度事や有へき思へはく此の度の腫物は愚老か爲には上もなき善知識ならずや然らば則ち如何なる供養をもし如何なる讚嘆をも述へ度く思ふに次第に癒け事の名殘惜さよとて打笑み給ひけるを其時隨侍申しける僧の物語しけるを聞たる所かし又或眞言家の驗者なりと聞へ給ふ法印の御房重き傷寒を惱給ひて晝夜の分ちもをわさてうなりとめさ給ひけるを弟子の小

學 碑

法師の小黙氣なるか打聽てあの御房の日頃の氣情にも似給はす吾等を
 呵責し給へる時の言葉にも似給はてあのうなり叫び給ふ事よとて打笑
 ひければ上人も打笑てやをれ小法師よ三日已前のうぬきは叫喚泥犁の
 苦痛三日已後のうぬきは最大微妙の法音なるを慢り笑ひて誹謗正法の
 御罰を蒙るへきと云れければ小法師かへして左許り早く手の裏翻す
 如くに成佛はし仕給へるに社と申しければされはと上佛も懈怠の衆生
 の爲には涅槃三祇にわたり勇猛の衆生の爲には成佛一念に在と説給へ
 るそや去し頃病苦の堪難くて次第に性體もなく惱み行まゝに來生の業
 苦を恐れ生前の行相を悔て泣明しけるが思ひ直して大日不二の觀念に
 入目を閉齒を切りて間もなく勤め進みたれば貴やないつしか病惱は掻
 拭ひたる如く打消病み臥したる形骸は瑜伽微妙の寶印と現じ圖らすも

金剛不壞の正體を成就し此うなりとめく聲は三密不思議の大陀羅尼と
 冥合し寢たる床は毘盧本有の大道場と打ち成四重圓壇の大曼荼羅は心
 上に嚴然として目前に榮たも嬉しや忽ち有情非情同時成道草木國土悉
 皆成佛の素懷を遂たるぞや小法師原か聞知べき事にしあらねとかく有
 難き惠日に逢たるは出度さに物語りはするとかしとて嬉し泣きに打泣
 く語られけるが後には道業比類もなくをはしける由其外異國にも殊
 宏の湯厄蒙山の痢疾何れも病に依て道心進み給ひける人々は問ま多き
 ぞかし和僧達は左許りの小病にけきたなく云ひ甲斐もなき有様かなな
 どかは昔の人々にも劣るべきや只今死なんすとも正念工夫目出度て死
 に給んには眞の佛祖の兒孫たるべきぞかくいへば重病受んを待て參禪
 工夫せよとはあらずけなげに健かならんずる人々も日夜に怠らず彼

人々の如く用心したらんには十人は十人百人は百人ながら學道成就せざる事はあるまじき予鬼にも角にも正念工夫程貴ふべく重んずべき事なるをと上正念の端的未だ悟入なからん人々は真正の導師に見へて第一に決定し給ふべし決定あらん後は四威儀の間正念工夫打失せざるを第一とすべし大慧禪師曰那時是打失處那時是不打失處一切處に於て是の如く點檢せよとこれは是れ從上の諸聖正念工夫親切の様子なりこれ則ち万古不易の正修なり是れを直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の真人とも云なり此の真人は空劫以前空劫以後少しも病氣なく鼻もしみたる事なき人はなるを是を法華には久遠實成の古佛と稱歎し給へり南嶽の隨意願行に普在靈山名法華今在西方名彌陀世末代名觀音と釋し給へるも此の真人の事なるぞかし此人を供養し此人を尊信し此人

禪

學

禪

一親近して打失せずんは何れの病か治せざらん何れの道か治せざらんや佛法中には病疲れたる老女痲痺けたる老夫なりとも正念工夫間斷無んは無病堅固の有力の人とす深ひ七尺八尺の身財あつて身子の智團かに滿慈の辨饒にして三經五論を講し得五家七宗の奧義を究め盡して力周鼎をわけ眼寶宇を空したりとも正念工夫なからん人をは臭爛膨壞の死人とする事なりあひかまへて容易に心得へからず寔に保ら難く寔に守り難きは正念工夫の大事なるを末代の悲しさは人毎に名聞の心強く利養の心盛にして道心ありけに見せかけ莊り立れども正念工夫決定の人を得難き事なり増て正念工夫相續不斷の人を求るに千人万人か中に一人もなき事なるを老僧十三歳にして此の事ある事を信し十六歳にして娘生の面目を打破し十九歳にして出家三十五歳にして此の山に遁

禪 學 禪

居す今年六十五に向とす中間四十年万事を放下し世縁を杜絶し專一に
 相守て漸く五六年来眞箇正念工夫の相續は得たりと覺ゆるを檀那施主
 に輕薄追從し利養名聞を希望貪求しなから參禪工夫せんとは寔に片腹
 痛き事なり往々に師學ともに常住の潤澤を榮耀とし多衆開熱を宗風と
 し辨財利口を智慧と思ひ衣食の結構を佛道に充つ尊大美麗を道德とし
 人の信仰を法成就ノ時なりとす悲みても尙悲むへきは得難き人身を名
 聞の奴婢に責使ひ上もなき佛心を妄縁の塵埃に吹埋ませて此の招請
 彼この供養には似合ぬ綾羅絹帛を惜けもなく着飾り得もせぬ禪道佛法
 を會釋もなく説散し無智の白衣に對しては孔明子房か辨口を逞ふし苦
 汗の財施を掠め取には目連鷲子の神通を得たり暫時の名利を偷み求め
 て因果を信せず報應を恐れず臘月三十日孤燈獨照半生半死の際に到つ

禪學

て泣うめき七顛八倒狂亂手脚の置處なくあかき死にして弟子門徒の面
 ふせになり給はんは違ひはあるまじきぞ今の人々の心は依にて禪修行
 の人といはい何國の誰か佛祖ならざるもの有べきぞ不思議の因縁にて
 かゝる物すがき處に來りて一夏をも明し給ふ者を何しに悪き事教へ申
 すべきや世間は知す老僧が破屋の内には甘く心易き佛法はなき事なる
 ぞ只兎にも修行者は吾身を高ぶる吾身を重んし吾身を最負する程悪き
 事はなき事なるぞや一年狼の多く來りて此麓の里へ宛をなせし時に愚
 者は七夜まで處々の墓原に坐し明したるぞ是は彼等に取圍まれ耳の根
 咽ぶなど吹嗅んする時に正念工夫間斷ありや否をためし試みん爲な
 り虵にもせよ水神にもせよ男子たる者の思ひ立取かゝりたる事を遂す
 や置べき仕果すやあるべきと思ひ定て如何なる飢寒をも忍び懲へ如何

禪學

なる風雨をも堪渡ぎ火の底に入り氷の底に浸りても佛祖の開き給ひたる眼を開き佛祖の到り給へる田地に到て宗門の大事を参歇し末後の奥義を徹了して十方参立の衲子を惱害し釘を抜き楔をうばつて以て佛祖の深恩を報答すべしと歴劫不退の大誓願を憤發し給は、病ひ何れの處にか漂泊せん古徳の修行に一人として疎かなるはなき事なれ共中に就て玄沙慈明などの幾多の艱辛を歴給へるは取分貴く覺ゆる事なり油斷し給ひたらば果して相似の修行者になり給ふべきを但しその相似とは似せ者と云事なり誰やの人か不足なき身に似せ者と成んと思ふ人はなき事なれども好法友の手引を受給はず道心深からずして少し許りの會處などを頼みて口を利き人にも貴はれ給は、見事なる似せ者なるべきをを操履を慎み正念を守りて人足り給はずは如何なる野の末山の奥處

禪 學 譚

ても飢死寒の果給ふべし黄金は菰に包みても黄金なれば實の佛祖の見孫神明掌るを合せて尊信し龍天頭を低て擁護すべきをかし陥ひ屈て財産を積み重ねて千僧の弊儀七寶の莊嚴あつて幡蓋目を奪ひ道場心を驚したりども閻王怒眼を張牛頭鐵鞭を撚つて相待んは苦々しかるへきとなど成の上刻より丑みつ頃まで物語りせられけるを傍に侍りける兩三輩只片時許りの心持にて感涙肝に銘し慚汗肌を侵し侍りき其後病中などに此物語りを思ひ出し侍れば忽ち慙愧の心起りて病苦も軽く成行様に覺へ候故あらし書付け遣す事延壽堂中の人々病中の道情の一助ともなれかしの心にて侍り去り乍ら如上は正受老漢平生受用底の施薬にして甚た一味單方攻撃の冷劑なり茲に又一方あり尤も虚弱の人に宜し心氣の勞疲を救ふ事甚た妙なり上昇を引下げ腰脚を温め腸胃を調和し

禪 學 譚

眼を明かにし眞智を増長し一切の邪智を除く事大いに効あり醍醐丸一劑諸法實相一斤我法二空各々二兩寂滅現前三兩無欲二兩動靜不二三兩綵瓜の皮一分五釐放下着一斤右七味忍辱の汁に浸す事一夜陰乾して抹す例の通般若波羅密を以て調鍊し丸して鴨卵の大きさの如くならしめて頂上に安着す初心の行者は藥種如何斤量如何を觀すへからず只色香散妙の醍醐鴨卵の大きさの如くなる者の我が頂上に頓在すと觀す病者此藥を用ひんと要する時厚く座物を敷脊梁骨を竖起し目を收めて端座し徐々として身心を洵定めて須らく思惟すへし大凡生を保つての要氣を養ふにしかす氣盡る時は身死す民衰る時は國亡るか如しと此の語を三復し了つて正に此觀を成へし彼の頂上に安着する醍醐鴨卵の如くなる者其氣味微妙にして遍く頭顱の間を潤し浸々として潤下し來りて兩肩及び

禪 學 釋

雙臂兩乳胸膈の諸肺肝腸胃脊梁腎骨次第に沾注し將ち去る此時胸中の五積六聚油癆塊痛心にしたかつて降下する事水の下にをもむくか如し歴々として聲あり遍身を流へ潤して下つて雙脚を温む足心に至つて即ち止行者再び此想念をなすへし彼浸々として潤下する所の餘流積り湛へ暖蒸して恰も世の良醫の種々妙香の藥物を聚め是れを煎湯にして浴盤の中に盛湛へて我臍輪以下を漬浸か如しと此の觀を作す時唯心所現の故に鼻根希有の香氣を聞身根妙好の觸觸を受け身心共に調適なり忽ち積聚を消融し腸胃を調和し肌膚光澤を生し大いに氣力を増す若し時々此の觀を成熟せば何れの病かせさらん何れの仙か成せさらん此れらは是れ養性の秘訣にして長生久視の妙術なり此の方始め金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に到つて大いに勞疲の重病を治し且つ其兄陳

禪 學 釋

桑が必死を救ふ澆末難遭の靈方より宜哉此道今人知得する底希なる事を老僧中頃道士白幽に聞き効驗の遲速は行人の勤とに在る而已怠らざれば長壽を得道ことなかれ鶴林老去て大ひに老婆禪を説と恐くは知音の一見して手を拍して大笑するあらん何が故ぞ不_レ臨_レ亂_レ不_レ見_レ貞臣操不_レ臨_レ財不_レ知_レ義士志

答_二于法華宗老尼之問_一書

老夫當秋より法華講演の刻み心の外に法華經なく法華經の外に心無と申し談じたりしを聞及ばれ怪き事に思して書通を以てなりとも右の道理を申し越し其外にも有難き事ともこれあらば書付遣し候様にどの御事これによつて大略の趣書き付け進じ候間何通も繰かへし披覽致され能を得心これあるべく候成程我等常々申し談じ候通り心の外に法華經

學 學 學

なく法華經の外に心なく心の外に十界なく十界の外に法華經なし是れ即ち決定至極の法理にて愚者に限らず三世の如來も十方の賢聖も極處に到つては皆々かくの如く説給ふ事にて法華本文の大意は大段此れ等の趣を宣給ひたる事にて此外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども皆權教の説にして方便の間と出ず至極に至りては一切衆生と三世十方の如來と山河大地と法華經と悉く不二同體なを法理を諸法實相と説給ひたる是れ即ち佛道の大綱なり大凡世尊一代頓漸秘密不定の法門有て無量の妙義をのべ給ひて五千四十八卷の諸經あれども其の中の至極の旨は華一部八卷の中に促り法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は妙法蓮華經の五字に促り妙法蓮華經の五字は妙法の二字に促り妙法の二字は心の一字に歸す心の一字は却て何れの處にか歸すとならば兎角

龜毛過_二別山_一畢竟如何欲_レ知_二無_レ味_レ傷_レ春意_二盡在_二停_レ針_一不_レ語時_一さる
 程に妙法の一心は展る則んば十方法界を containment し取る則んば無念無心の
 自もに歸す此故に心外無法とも説給ひ三界唯性と經諸法實相とも説給
 ひぬ其の極處に到つて心法華とは云此無量壽佛と云禪門には本來の面
 目と云ひ眞言には阿字不生の日輪と云ひ律家には根本無作の戒體と云
 ふ皆是れ一心の異なりと覺悟致さるへし然るに妙法蓮華經の五字一心
 の源を指とは如何なる證據かあるとならば取も直さす直に此の妙法蓮
 華經の五字よさらたしかなる證據にて侍り如何となれば妙法蓮華經とは
 一心不思議の徳を讚歎したる題號にて一心本具の性徳指顯したる言葉
 なり子細は太凡手續にもせよ畫圖にもせよ誰々は琴の妙を得たり誰々
 は琵琶の妙を得たりと云れんする人も其妙とは如何なる場所を申すは

禪 學 釋

待るぞと問れたらん時に如何なる辯才利口の人にて中々言葉に演る
 事は叶ざる事なり去る程の父子不傳の妙とて吾太切なる一子にさへ教
 る事は能はず妙處に到つては吾とても覺ゆす知す處より働さ出る事な
 り人々具足の妙法の心性も左の如し只今此の文を披覽し或は笑ひ或ひ
 談に緒環の絲繰出す如く果しもなく五人に逢ても十人に逢ても少しも
 間違もなく働らさもて行事不思議なる_二様ならずや然るに何物か斯の
 如く自由には働く事ごと内に向ひて尋ね求るに聲もなく臭もなし然は
 一向に頑空無記なる物にして木石の如くなりやと思へは例の通り千變
 万化自由自在にして有と云んとすれば有に非ず無と云んとすれば无に
 非ず言語道斷脱洒自在なる處を假に且く妙法とは名付給ひたる事なり
 蓮華とは蓮華の蓮の泥土の底に有ても少しも泥土に汚されず妙なる色

禪 學 釋

香を具足して失はず時を得て麗はしく咲き出るは此の妙法の佛心の衆生に在ても穢れず減らず佛に在ても淨さらず増す佛も凡夫にて在し時は一切衆生に少しも違はせ給はて五欲の泥土に汚され給ふは左なから是れ蓮の泥中に在が如し其後雪山に於て本具の心性を發明し給ひて希有なる哉一切衆生如來の智慧徳相を具すと高聲に唱へ給ひて頓漸半滿の諸經を説宣三界の大導師と成り給ひて梵天帝釋に尊信せられ玉へは蓮の泥中を出て麗しく發けたるか如し蓮の泥中に屹度具足して居たりし色香を水上に咲き出すか如く佛も无量恒沙の法を宣給へとも外より持來り玉ふに非す凡夫にてをばせし時屹度具足し玉ひし佛性の有様を其儘に宣玉ふ者なり衆生にてをばせし時も成佛の本懷を遂玉ひて後も一心の妙法は少しも添減なきか如く蓮の泥中にありし時も咲亂れたる

夏も少しも變遷なきに等し故に假り用ひて且く一心の妙法に譬へ玉ひたる者なり是れ即ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名つけ玉ひたる儘なる證據ならずやさて又經とは常と云る字義にて常住佛性の義を顯し玉ふ者なり常住佛性とは此の心性は佛に在ても増もせず衆生に在ても減しもせず天地と同根万物と一體にして曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指て經とは説き玉ひたるなり然れば妙法は佛心の體蓮華經は佛心の妙法を譬に設けて讚歎し玉ひたるにて畢竟一心の異名なり一實二名餅を歌賃と云た程の事なり然れば眞實の法華經は手にも把れす目にも見へざる者なるを如何にやわ受持すへきを如何様に心得たるを法華經の行者とは云へきことならば蓋し三種の根機ありて下根の行者は

黃卷赤軸を把ひて讀誦書寫解説し中根の行者は自心を觀照して此經を

受持し上根の行者は眼こに此の經を見徹し自心の面を見か如し是故に
 涅槃經に曰如來目見事性とは是れなり法華經の行持は大乘至極の眞
 修なれば中々容易の沙汰にし非ず易き事は甚た易く難き事は甚た難し
 去る程に本文にも此經難持若暫持者我即歡喜諸佛亦然と説玉ひて至極
 大切の行持なり天台の智者曰手不執卷常讀是經口无言音遍誦
 衆典佛不說法恒聞法音心不思惟普照法界とは是れ眞正誦經の
 様子なり試に問ふ卷を執らすして誦する底是れ那箇の經と自心の妙法
 に非ずや思惟せずして徧く法界を照すとは何物を眞正の蓮華に非ずや
 是を無字經と云徒に黃卷赤軸のみを把へて法華經なりと偏執するたぐ
 いは彼藥帖上の記を紙つて藥なりとして病を治せんと計る者の如し大
 に錯り了れり若人此經を持んと欲せば十二時中胸中一點の缺曇りもな

學 障

く不思善不思惡の當體を正念工夫の眞修と云ふ去る程に拾得子の偏に
 も欲識無爲理心中不掛絲と斯の如き正修は三世の如來も一切の
 智者高僧も此處より大悟得道し給へる事にて万古不易の大綱なり一念
 不生前後際斷頓悟成佛の直路なれば如來の此經難持と宜經へるも理り
 至極ならずや大凡三教の聖人も實處に到つては大段同し其進修の淺深
 精麁に依て得力の高下はあるべけれども最初の一步は超等し儒門には
 此處を云至善と未發の中と云道家には虛無自然といひ神家者は高間か
 原と相傳す天台には一念三千止觀の大事とす眞言にては阿字不生觀法
 と云家々の祖師達の坐禪を進め誦經を勧め給ふも誦々唱て一心不亂純
 一無雜の田地に到らしめん方便ならずや永平の開祖も行持あらん一日
 は費ふべきの一日なり行持なからん百年は恨むべきの百年なりと宣ひ

障 學 障

さ寔にたましく受け難き人身をうけながら何の行持の心もなくて逢ひ
 難き一生をやみくくと犬猫などの何の覺悟もなくて朽果る如く苦しか
 りし三塗の舊里へ懲もなく立歸らんする事口惜く淺猿の境界かなど涙
 を落すべき事なり然るに難きことは甚だ難しとは我れ得て疑ふ事なし
 易き事は甚だ易しとは如何なる故ぞとならば若人此の經を手を放ちて
 行住坐臥にやすくと持んとならは誓つて一回法華眞の面目を見届く
 へしと願ひ玉ふべし法華眞の面目を一見したらん上は咳唾掉臂動靜云
 爲草木瓦石有情非情悉く皆な妙法蓮華經と現成する故に十二時中此の
 經と冥合す何を別に持つ事を用んや眞の法華を一見せずして法華經を
 持たんと擬するは譬ばこゝに一人あらんに手に一椀の水を擎てこぼさ
 じ動かさじと晝夜に慎しみ守りて養ひ増んと願ふが如し縱は一生擧げ

守つて十成なるも養ひ増す事は存じもよらず自家の飢渴も亦救ふ事能
 はす彼の二利の願行に於ては望みを其の間に絶ものなり何の用を作に
 か堪んや若又眞の法華を一見して此の經を持つ人は彼の一椀の水を江
 湖に投するが如し忽ち三万六千頂の煙波と混合し德澤を大湖と共にし
 て飛者走る者翔る者蠢く者同く共に行て呑んに盡る事なし眞の法華を
 見ざる人は一椀の水を擎る人の如し他を利する事能はざるのみに非ず
 自己も亦利する事能はじ眞の法華を一見する人は彼の一椀の水を江湖
 に投するが如し覺へず諸佛の大寂滅海に投入して諸佛の眞法身成定智
 慧と冥合して忽ち頼耶の暗窟を擊碎し大圓鏡光を放出して塵沙劫を經
 て大法施を行せんに終に乏しき事なし一見法華の功德の廣大なる事上
 下四維等匹なし人あり一切諸經論を熟讀せんよりはすべからく眞の法

華を一見すへし無量の寶塔を修造せんよりはすべからずまことの法華
 を一見すべし百千の佛を造立せんよりはすべからず眞の法華を一見す
 へし三界の秘密を學得せんよりはすべからず眞の法華を一見すへし彼
 の黃卷赤軸のみを把ひて法華經なりと偏執せんよりはすべからず眞の
 法華を一見すへし口に百千万部の法華經を讀誦せんよりはすべからず
 眼に一回眞の法華を見るへし是實に成實不壞の高談なり如何して法華
 眞の面目を徹見すへしきととならば先須らく大疑團を起すへし何物を
 指てか法華眞の面目とはするぞ自己本有の妙法の一心なりとは聞か
 らに自心を見るにしかず自心とは如何なるものを白き物とやせん赤き初
 とやせん是非く一回見得すへきとと猛く甲斐くしき志を騰つて大
 誓願を起して晝夜に究め見るべし自心を參究するに行持は様々多き中
 に法華經の行者ならば法華三昧の行持に趨たる事や侍るへき法華三昧

禪 學 禪

の行持とは今日より思ひ立て憂につけつらきにつけ悲きにつけ嬉きに
 つけ寐ても覺ても起ても居ても只た管に法華の首題を南無妙法蓮華經
 くど問もなく唱へらるへし此首題を杖にも力にもして是非とも法華
 眞の面目を見届くへしと深く望をかけて唱へらるへし願くは出る息入
 る息を題目にしてはしき事よと随分親切に間斷もなく唱へらるへし唱
 へくして怠らすんは久しからずして心性たしかに大石などを淘居たる
 如くにて安住不動如須彌山の心地ははのかに覺へあるへし其時にすて
 置す随分唱へらるへしいつしか聞き及びし正念工夫の大事に契當して
 平生の心意識情都て行はれず金剛圈に入か如く瑠璃瓶裏に座するに似
 て一點の計較思想なく忽然として大死底の人と異なる事なけん纒かに
 蘇息し來らは覺へす純一无雜打成一片の眞理現前して立ち處に法華眞

禪 學 禪

の面目に撞着して忽ち身心を打失し本門壽量久遠實成の如來は目前に
 分明にして推とも去らし此時に當て天台の法性寂然寂而常照の寶所に
 投入し眞言の阿字不生の惠日に照され律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥
 合し淨土の即心往生極樂報土の素懷を遂げ水鳥樹林念佛念法念佛の妙
 莊嚴をまのあたり見届け娑婆即寂光の正眼を開き草木國土悉皆成佛の
 田地に至らん事毫釐も相違あるへからず然らば則ち人中天上の善果何
 事かこれにしかんや是即ち三世の諸佛出世の本懷なり一遍の題目は禪
 門一則の話頭と其功異なる事なし此等の趣き三世十方の賢聖扶桑八萬
 餘座の神慮もかわする者を老僧か毫髮はかゆもあやむ處おらは何處
 に罪作りにくた／＼し事を書贈り侍るへさや少しも疑ひ玉ふへから
 ず此上猶又怠り玉はずは禪門にいはゆる左手を握て中指を咬等の心地

禪 事 禪

も次第に明かなるへし今時往々に道參禪無益なり話頭了して什麼かせ
 ら即心即佛の直指なれば念の起るをも愁へず念の止たるをも喜ばず幽
 賤の白木の合子只生れ付たる自性の儘なるがよさを漆つけねは劍色こ
 と無れとて日々徒に盲龜の空谷に入が如し去て足て足りとす此は是天
 竺の自然外道の所見なり恁麼にして佛心向上の宗旨なりと稱せば七村
 裏の土地も亦掌を撫して大笑すへさどかし何が故ぞこれ總に長沙の謂
 ゆる職神を認得する底の癡人ならずや楞嚴に賊を認て子となす終に无
 淨明の體を知る事能はずと呵せられんは此等の部類なり殊にしらす如
 來は四果の聖者の諸漏已盡し我法の眞理に達し神通具足し名稱普く闡
 く給ふをさば禪を知りと許可し給はず故に經曰我弟子大阿羅漢不能
 解此義唯有三大菩薩衆應解此義とも説給へるものを見性の功さへ

禪 事 禪

なくて妄りに自ら尊と稱すは何の心をや人は只鬼もあれ萬縁を抛擲して唱るに越たる事はなき事なり去なから題目ばかりの利益なりと執偏給ふべからず真言に限らす何れも優劣あるべからず淨家の人々は專唱稱名の功力に依て是非々々一回唯心の淨土已身彌陀の妙相を見届けや置へざると決烈の大志を憤起し頭然を救ふが如く問もなく唱へ進みたらんに佛も去此不遠と説き給ひたる者をなとや七重の寶樹八功德池の有様を見届けずやはあるべし真言の人々は陀羅尼微妙の威力に依て是非とも阿字不生の大日輪を拜し奉るべしと禪門に於て一則の話頭を擧揚するが如く精進勇猛の憤志を震つて練たらんに高野大師も不轉肉身と唱へ給ひたる者をなとかは彼金剛不壞の正體を歷出さずや有へば何れも死後を待て利益に預んと打延し給ふは不覺抽斷の至り覺束なきも

禪學

のぞかし遠き事とな欺給ひと八重の潮路をとてたる唐土天竺の事を見給へ聞給へと云にこそ遠き事とは欺くへけれ自心を以て自心を見る吾瞳を見るより近き事には侍らすや深き事とな恐れ玉ひと九淵の潭の底千尋の海の中なる物を見玉へ聞玉へと云にこそ深き事とは恐るへきなれ吾心を以て吾心を見る吾鼻を以て吾鼻を嗅より近き事には侍らすや世は末世なれ共法は更々末世ならず末世なりとて打捨顧み玉はすは賣の山に入なから自ら飢凍を苦しむか如し末世には去事は及ばぬ事とな恐れ玉ひと遠は惠心院の僧都近は赤澤の即住山城の圓愚何れも稱名の方に依て右の素懷を遂げ玉ひたるをが法然上人も此望は深くかわしけれども先達なき故に翼短ふして長空に翔らざる心地なりと宣ひき末法澆季の暇にや近代悪き風俗起りて出家も在家も見習ひ聞習ひになり

禪學

て今時妙法の佛心などを見念と計るは鯉か木のほらんとする心地なるぞとて闇々と一生を過行事淺まじき心ばへならずや是は左なから過分の田地を譲れたりし百姓の子共數多在べし其内一人腰財不肖にて然も口利で小賄しけなるか曰く今時吾々風情の柔者ともか先祖蓄し人々の真似美して農業耕作などして大勢の妻子眷屬など養育せんと計るに及ひもなき事なりそれは左なから家鶉か鷹の真似して鶴と組で落んと羽つくりするが如く鰻鱺の鯉魚の真似して灘上りせんとして頭さし伸るに似たる事を片腹こそ痛けれ左しめて行たらんは必ず鎌にて水をなん呑へきと存しもよらぬ事なるぞとよつども見よや和殿原や我等如の疲孩子者ともか芝野を見るか如くなる草生茂かたる田地を草刈切立耕し水畝働上種子かし早苗植つけし耘り刈干こむは糠すじ糶

學 問

ない菰あみあけ高あくらしで詠め見んする事あなや通途にも遠らるへき事かはそれは昔物語なるぞあらぬ様なる端立なるぞや夫よりは安々と挿入袖して世渉るすへはある事をやかなたこなたあるきでも五日三日宛の日は送らるゝぞかし肩有て着すと云事なく口有て食すと云事なしと聞ものを殊更何某の國何某の侯は仁徳厚をはして我々如き者をば扶持し給ふと聞なるに果はそこへなし行べきと斯許よき事のあるにに歎く事の有べき手足をなん動かして自力にて口過んとかは又なき癖事なるそ心ばかりいなしと初より下手に組かよきを働たてなしをかせき振見するな一二枚ある古着も脱すて菰をなん被らで我々は告る方もなく居と立とに迷ひたる貧窮下賤の者は侍も哀れ助け給ひてよと打泣々往たらんに慈悲深き世の中なるものをなと口六つばかりすき録る

學 問

事のあるべき少しも疑ふ心なふて鬼せよ角せよと教へられて悦び勇て
 誰々も兼てより斯なん思つる事よとて生れ付ぬ資者に成て一生を送
 るに似たり此等の輩を自暴自棄の人と云臨濟大師は甘作下劣人と呵
 責せられり是は左ながら魚の水中にありながら我等風情にて水など見
 んと計るは及びもなき事なりと歎き鳥の長空を翔りながら今時長空な
 どを見んと計るは存じもよらぬ望みなりと悲むに似たり殊にしらすや
 十方法界の中真如ならざる國土なく妙法ならざる衆生なき事を惜むべ
 し唯心の妙法寂光浄土のまつたい中に住ながら生前には娑婆なりと偏
 執し衆生なりと妄想し死後には地獄なりと見錯り無間なりと泣悲む事
 皆是目前に充溢たる妙法の佛心前後に澄湛たる法性をば及もなき事な
 り存じもよらぬ望みなどて打棄て筋なき妄想情識の料簡を顧みて空く

禪 學 禪

暮せるより起る事なり惜みても惜むべきは三界無比の妙法醍醐上味の
 經典なれども教への如く修行する人なき故に文事に稱載たる世の並々
 の書籍と共にあり甲斐もなくやみくも朽果穢土淨刹と見違ひ三塗六
 趣と思ひ成事歎の中の歎ならずや問ふ教への如くとは如何なる教へを
 か指や四安樂の法門か五種の法師の行持か曰稱然らす方便品に謂ゆる
 開佛知見道故出現於世の本文經中の眼目なり番々出世の如來无量恒沙
 の法を説玉へ共何れも一切衆生に佛知見を開かしめん爲なり然らば佛
 知見の望なくて如何なる法を行したりとも諸佛の本懷に契事は努々こ
 れ有へからず開佛知見とは一心の妙法を發明する事なり悲みても悲む
 へきは今末世澆季の世の中なれば一心の妙法の沙汰はすたれ果て思ひ
 くの有様なりたましく有るに似たるも此の頃は皆々教へ事になりて

禪 學 禪

云ひ甲斐もなき風情なり大日經にも如實知_二自心_一と説玉ひたるものを
 顧る人さななけれ法華經の教に隨はず妙法は何地に有もしらてうる
 くとして西を東とて混さわさに廢廻りて佛道なりとて月日を送る
 は譬へは此に大福長者あらんに初め多少の艱難を経て限りもなき田地
 を切開きて汝等も此田地を耕して我如く大福長者になれとて大勢の子
 供に優劣もなく過分の田地を讓與へたりしに父の教に隨はずして何れ
 も他國に流浪し人の門戸に傍ひ乞食するもあり我は鏡ときなりとて瓦
 を把て磨き行もあり粟稗の鳥を追てすくみ居もあり長者の子なりとて
 自身は乞食非人の體にて亂りに人を輕しむるもあり田畑の帳面ばかり
 毎日繰かへして田畑の有處も知ぬもあり帳面さななれば恐るゝ事はな
 きとて恣に惡行を行するもあり我は長者の作法を知らずとて飢渴と

作法ばかり行するもあり田畑の有處もしらで晝夜に田畑くくと叫もあ
 り田地の廣大なるを少し許り見付て大橋慢して淫酒食肉心に任せて亂
 行なるもありて長者の心に契たる子は一人もなきが如し田地とは一心
 の妙法を指なり帳面とは諸經論を云なり人の門戸に傍て乞食するとは
 かの開佛知見の大事は自身艱難刻苦して冷暖自知する事なるを末世に
 なりては人の教を受て正體もなき事を聞覺へて是大を大悟とする事な
 りこれは法經華の中の窮子ならずや方等部にては四果の聖者をさへ二
 乘凡夫と呵責し給ひし者を人々の教へ給ふ通りの埒もなくたわいもな
 く繩にもかづらにもかゝらぬ事ならば何しに佛六年迄雪山に閉籠て皮
 骨連立し絲を以て瓦を編立たる如く瘡疥へ盡すゝきの膝を突貫て臂を
 で穿ち抜たるをも覺へ給はず目のあたり雷の落て牛馬を打殺したるを

も御覺へましまさぬ程苦吟し給ひて初めて佛知見を開き給ひたるは如何なる事とや蓋し佛道も上古は大ひに難く今時は大ひに易しとするか且蘿蔔を蒸し芋栗を煮るか如く初めは硬く後には硬かなる者とするか今時の易さか是ならば古の難さは非ならん古の難さは非ならん今時の易さは非ならん古の難さは苦吟する事は甚だ苦吟す後に發轉する時は忽ち賢聖佛祖たり那邊を透過し今時を透過して毫釐も觸着すれば電轉し星飛ぶ今時の易さは殊勝なる事は甚だ殊勝なり望み見る時は畫圖の賢聖僧の如し纒かに發轉する時は依然として困魚箱に止り跛鼈裏に落つ今時を透らず那邊を透らず接着すれば踏躑氷稜に上る今時の易さを取んか古への難さを取んか如何に末世なればとていひ甲斐もなき者様なり古人も末々は禪法も正體もなく成果へきを知り給ひけるはや妙

禪學

心を瘡紙に求め正法を口談に付すとは兼て悲み云置れたるなるべし此の事もし紙授口傳にて濟べくは神光の臂を斷ち玄沙の足を傷ひ法心はは頭雁法燈の涙を落す事はこれあるべからず人は鬼もあれ角もあれ我は是非く晝夜に間もなく首題を唱へて眞の法華のあり様を見届くべきと親切にさへ唱へ給はる雪山には入す頭は腫すとも決定必定自性の妙法蓮華は麗しく開け侍へるべしな、肝要は自心の妙法を見届けずは置まじきと望み深き程貴き事は無事なり如來世尊も自心の妙法を見届け給はざりし間は流轉常没の凡夫に少しも違まじきで生死往來し給ひき末後雪山に於て自心の妙法を見付け給ひて初て正覺を成就し玉ゆ事なり瓦を磨くとは八識賴耶の無分別識を認て本來の面目なりと合點して忘念さへ無れば其の迹は鏡の如くなる佛心を只鏡の万境を寫

禪學

して鴉は黒く鶯は白く柳は緑に花は紅に少しも錯らず照せ共毫釐も差
 を留ぬ如く時々悸動めて拂拭せよと教へられて晝夜に忘念を拂ふは死
 を磨き粟稗の鳥を逐に同じ是を識神を認むと云山河大地を照破する光
 明の發する事はなき事なり此類の修行は昔より大唐にも聞多き事なり
 南嶽大師の高馬祖の巷前にて瓦を磨き給ふも馬祖に此意を知しめん爲
 なり去るに依て長沙大師の偈に曰學道之人不識眞只爲從前認識神
 一無量劫來生死本癡人喚作本來人一是故に慧明眞淨息排大慧等の祖
 師齒を切つて觚排して親切を盡されし事なり其外の諸師の有様は逐一
 擧するに及ばず大凡三世十方の間に見性せざるの佛祖なく見性せざる
 の賢聖はなき事なり是乃古不易の大綱なり見性とは法華眞の面目を見
 届る事なり此なくして種々の事して佛法なりと心得るは船頭もなき大船

禪學

に幼童多く驚ひ乗て何地へよるべき漕舟もしらぬかなたへ漕舟好む此方
 へ漕か好むとて思ひくへに櫂棹推たて昨日は東の方へ湖に隨ひて漕ま
 漂ひ今日は西の方へ汐に隨て漕き漂ひ終に海中を出る事能はす其の船
 中へ案内しりたる船頭忽ち打乗磁石を見定め楫を把持は一日の内にも
 思ふ漕へ着事なり船頭でと見性の大志なり磁石とに正法の指南なり楫
 とは平生の志行なり如何して妙法の漕へは漕入べきととならば一切の
 行人は佛を求め祖を求め涅槃を求め淨土を求めて外へくへと出る風情
 なり故に轉求めは轉遠く轉尋れば轉遙なり眞正妙法の行者は即然乎自
 已本有の妙法は如何なる物と推究て佛を求めず祖を求めず彼妙法は
 内に在とやせん外にありとやせん内外中間にありや又青黃赤白なりや
 是非く一回見届けずは置くへさると十二時中一切處に於て聞斷なく

禪學

猛く甲斐くしり氣概を推立流石の者か思ひ立たる事を遂すや置へり
仕果すやあるへりと懸ても覺ても起ても居ても捨をかす晝夜に點檢し
て或時は打返して恁麼に尋る底是れ何物ぞ何物ぞと尋る爾は是阿誰と
進み入る是れを獅子人を咬の法と云心の妙法は如何くとはかり尋ね
もて行を韓盧塊を逐と云唯兔にも角にも万事を放下して無念無心にな
りて南無妙法蓮華經ノと唱へ玉ふへし此外別に有難き法理の老僧か
書送るへき事ありと思さは上もなき錯りにてこれあるべく候

答念佛與三公安一優劣如何之問書

先書に正念工夫相續不闕の助けに念佛せよと勸むるものも是れ有り如
何ん趙州の無字と御尋ね吁嗚なる思召しに候人を殺すに刀を以てする
有り鎗を以てする有り一殺なるとやせんか將た死た別に至極有りやと

問はん如何か答へ玉ふべきや刀鎗器は異なりと云へとも其の殺すに
到つては豈に兩股有んや去るほどに忠信は碁盤を振上げて敵を追ひ篋
塚は船梁を引さはづして人を打ち呂后は鳩酒を執つて如意を毒害し玄
武は葉絃を解て妓女を縊殺し關羽は龍力を提げ張飛は蛇棒を取る刀鎗
は兩股なけれどもただ執る人の利鈍と真偽との兩股に在るらくのみ學
道も亦然り或は定坐し或は誦經し或は颯呪し或は念佛し努め力めて前
後際斷の處に到つて無明の暗窟を踏翻し五欲の凶賊を逼殺し大圓鏡光
を擊碎し四智圓明の正位を逸過し大事を成辨するに到つては行持は輕
い品な異なれどもその所證に到つては豈に兩股有んや茲に人やり力量
骨格互ひに相同と各各堅甲利兵を執つて相戦はん一人は志念堅から
ず或ひは疑い或ひはおそれ或ひは疑がひ或は戦んとし或は走らんとし

て死生決せず進退定まらず眼目定動し步履正しからずしどるに成て相進まん一人は危亡を顧みず強弱を觀せず一身を必死の地に擲着し目を居へ齒を切つて大精神を震つて斷斷として相進まば此の兩箇の勝敗は掌ろを見るが如けん十騎にして千騎に對し百騎にして万騎に對すといへども百戰百勝目前に分明なり譬へば兩陣相對せんに一方は金銀を以て募り傭いたる雜兵十方又一方は仁恕を以て志を合せ忠義を以て練め鍛たる精兵一千此の千騎を放つて彼十方に當てんに惡虎の群羊を驅るか如けん是れ他なし只大將の賢と不肖とに在らくのみ豈に勢の少多器の長短に依らんや工夫も亦然り一人有り常に趙州の無の字を擧揚し一人有り常に專唱稱名せんに無の字を擧する人は工夫純ならず志念堅からずんは雜い擧して廿年二十年を経るども何の利益か有ん稱名の行者

禪 學 禪

は打成一片に稱名し純一無雜に專唱して穢土を觀せず淨土を求めず一氣に進んで退かずんは五日三日乃至十日を待すして三昧發得し佛智煥發して立地に往生の大事を決定せん往生とは何をか云や畢竟見性の一着なり經に曰く我國に生れんと十念唱へたらん人の我國に往生せずんは正覺を取らしと誓ひ玉ふ我が國とは何れの處を目前歴歷たる底の本具の自性に非すや見性の人に非すんはたやすく見る事能はし若然らずんは今時諸方淨業の人々日々にとなへ唱へて千念万念千億万念す然ふして往生の大事を決定する底はし半箇も亦無知らず無量壽尊正覺を取る事を廢し玉はんか殊に知らず一念直に是れ極樂往生國豈に十聲を待んや此故に佛の宣すはく勇猛の衆生の爲には成佛一念に在り懈怠の衆生の爲には涅槃三祇に亘ると説玉へり若無の字と稱名と兩般の看を成

禪 學 禪

は須らく知るへし盡く是れ邪魔外道の種族なる事を悲む所は今時淨業
 の行者往々に諸佛の本志を知らず西方に佛在りとのみ信して西方は自
 己の心源なりと云事を知らず念佛の功課に依て虚空を飛過して死後西
 方へ行んとのみ覺悟す一生苦吟して往生の素懷を遂る事能はず殊に知
 らず十方佛土中唯一乘法なる事を此故に言佛身法界に充滿して普く
 一切群生の前に現すと若し佛西方にのみをわさは一切群生の前に現し
 玉ふ事能はし若一切群生の前に現せば特り西方に限るべからず悲ひ哉
 如來清淨の眞身は爛煥として目前に分明なる事掌を見るが如くなれ
 ども惠眼既に盲いたる故に都て是を見上つる事能はず豈に言はずや光
 明遍照十方世界と蓋し光明と世界と兩般の會を成し玉ふべからず悟る
 則んば十方世界草木國土を全ふして直に是れ如來光明の眞身とし迷ふ

譯 學 釋

則んば如來清淨光時の眞身を全ふして錯つて十方世界草木國土とす此
 故に經に曰く若し色を以て我を見音聲を以て我を求めば此の人邪道と
 行じて如來を見上つる事能はしと眞正淨業の行者は即ち然らず生を觀
 せず死を觀せず心失念せず心顛倒せずとなく唱へて一心不亂の田地に
 到つて忽然として大事現前し往生決定す此の人を指て眞正見性の自身
 直に是か六十万億那由佗恒河沙由旬の彌陀七重の寶樹八功德池心上に
 昭昭として目前に煥燦たり山河大地象森羅盡く是れ微妙希有の莊嚴海
 なる事徹見す專唱稱名一念不生放身捨命の端的を往と云三昧發得眞智
 現前の當位を生と云如上の眞理煥然として當處湛然一毫をも隔てず滿
 出するを來迎とす來迎往生直下不二見性の當體なり元祿の頃とい二
 人りの淨業者あり一人りを圓愍と云ひ一人りを圓愚と云ふ二人志を同

譯 學 釋

して專唱怠る事なし圓愆は山城の人也唱念純一果して一心不亂の功致
 に到つて忽然として三昧發得し往生の大事を決定す此に於て遠の初山
 に上つて獨湛老人に謁す湛問ふ汝らは是何れの處の人ぞ愆曰く山城湛
 云く何れの宗をか業とす愆曰く淨業湛云く彌陀如來年多少と愆曰く某
 甲と同年湛云ひ汝ち年多少と愆曰く彌陀と同年湛云く即今何れの處に
 か在る愆即ち左手を握て少く揚ぐ湛驚て曰く汝は是れ眞箇淨業の人也
 と圓愆ひ亦久しからずして三昧發得し大事決定す元祿の初め豆州の赤
 澤なる處に行者あり即往と云彼れ亦た稱名の力らに依て大ひに得力あ
 り予向き此の兩三箇の傳を記す逐一枚擧するに違あらず是れ即ち專
 唱稱名得力の現證なり須らく知へし話頭も稱名も總に是れ開道佛知見
 の助因なる事を開佛知見は諸佛出世の本志なり後來且く方便を設けて

往生と名つけ見性と云ふ豈にそれ兩般有んや是れ等の意を見徹せざる
 故に禪者は淨業の行者を見ては無智昏愚の凡夫見性の大事有る事を知
 らず妄もに唱へて白晝に十萬億の刹土を飛過して極樂國土に往んとす
 恰かも跋鼈の身つくりいて唐土へ飛んとするか如し殊に知らず十萬億
 土は十惡八邪佛智開明の曉き十惡八邪忽ち氷消して當處即ち極樂國土
 なる事を知らずと云て輕賤す淨業の行人は禪門の諸子を見ては如來他
 力の大誓を信せず自力貢高の我慢を主張し大悟して生死を出んとす片
 腹痛き風情ならずや末代下根の我々か及ふべき事かは左から家鵝の朝
 鮮へ翔つて鷹と羽節を較へんと羽つくりするに似たりと慢り狹す法
 華經の行者は乃ち曰く吾か經の如きは三世の諸佛出世の本懷一切の如
 來成道の直路なる醍醐上味の妙經を指し置き稱名參禪何の用を剩さへ

妙經轉讀の法師を見ては唯一乘の圓解を獲せず諸法實相の知見を聞
 かす只毎日わわとのみ叫ひて偏へに春の蛙の眸にわめくに似たりなど
 舌長き雜言如阿梨樹枝の金文も顧りみざる愚人皆是れ邪魔外道の所行
 なりと嗔り恨む殊に知らず法華は阿含方等四味の階漸を蓋過し開佛知
 見の至要を演此故に本文に曰く開佛知見道故出現於世と正に知るへし
 圓解の煥發を以て出世の本懷とする事を然らば則ち參禪も念佛も及び
 看經誦經をさへに盡く是見道の補助にして行路の人の杖の如くなる事
 を杖に藜杖あり竹杖あり藜竹品な異なりといへども其行を扶くるに至
 つては一なり言事なかれ藜は可にして竹は不可なりと若其れ行客心屈
 し體疲れて起事能はずば藜杖竹杖何の用を成にか堪んや參禪も亦然り
 只肝心は行者勇猛精進の一念子に在らくのみ云事なかれ話頭是にして

禪 學 碑

稱名不是なりと行人若し勇銳の志し無くんば稱名も話頭も瞽者の眼鏡
 法師の櫛貯はへ果たして是何の用を茲に數百人あらそに帝都へ行んを
 願ふて各各糧を包んで出づ先達好らずして錯つて邊境邊土虎狼充滿の
 廣野に留つて徒に日日杖の知長を争そひ行装の可否を論じ路費の多少
 を計つて杖杖どのみ唱ふるあり路費路費どのみ叫ぶあり終に一步をも
 進むる事を知らず空しく歲月を送つて歳衰へ體疲れて果は虎狼の爲に
 獲られ遠路邊境の閑神野鬼と成り果るに似たり終に帝都に到る事得ず
 只肝心は杖子を擇はず行装を論せず一氣に進んで退かず速かに京師に
 到るを以て賢なりとす若し今時に効つて生前に佛力を頼んで死後に西
 方に往んとならば一生三昧發得往生決定する事能はじ況んや真正見性
 の大事に於てをや去る程に眞珠菴主の歌に行く水に數かくよりも墓な

禪 學 碑

きは佛を頼む人の行末へと蓋し斯く言へばとて淨業を嫌ひ稱名を狹するにし非ず正念工夫相續不斷見性了義の扶けにとならば稱名はさて置き粉拽歌にても唱へ玉ふべし相構へて見性の秘を捨て置き專唱の功勳に酬へて佛にならんと計り玉ふべからず其子細は譬へば茲に萬石の大船あらんに思ふ儘に艤いし順風を七合に受舟歌を張り櫓拍子を揃へて主水楫取心を合せて千尋の浪を押し切り八重の盤路を消抜んと毎日勇み進むと云へども纜を切て放たざらん限りは中々浩波を渉る事能はず徒らに日日氣力を勞すといへども元の湊に在らくのみ願ふに纜の金緒なれども大船を留むるに至て万夫も及べからず學道も亦然り譬へば茲に一個有んに宿に靈骨有つて英豪の氣を具し神俊の才を備へ剩さへ馬祖百丈を師家とし南泉長沙を同伴とし勇猛の顯氣を養ふひ打成一片に

禪 學 錄

に進み純一無雜に修したるとも命根截斷せざらん限りは園地一下の歡喜は努々これ有へからず命根とは何ぞか云や無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり天堂地獄穢土淨刹を作出し三途六趣を現成する事は皆是彼れか力らに依れり夢幻空華の細念なれども見性の大事を妨げる事は百千の魔軍にも超へたり空華の細念とも名つけ生死の命根とも名つけ煩惱とも名つけ陰魔とも云ふ一實多名子細に看來れば畢竟我見の一法に歸せり有我に依るか故に生死有り涅槃あり煩惱あり菩提あり此故に言ふ心生すれば種々の法生し心滅すれば種々の法滅すと又若し我相人相衆生相あらば即ち菩薩にあらずと佛に問玉はく善男子何等の法をか修して大涅槃の法に契當する事を得る迦葉菩薩其時五戒十善十八不共六度萬行八背遮無量の法門逐一擧げて答ふれども佛に

禪 學 錄

總に許可し玉はず迦葉佛けに問ふ世尊何等の法門か涅槃に契ふ事を得
 るや佛のの玉はく但無我の一法のみ涅槃に契ふ事を得たりと然るに無
 我に両般あり人あり常に心身怯弱にして一切の人を恐れ心氣を殺して
 万縁に應じて罵れども瞋らず打擲すれども管せず常に癡々呆々として
 一事を経ず一智を長せず我は是れ我を得たとして足れりとす此れは是
 一個の破飯糞泥猪の肥へ腴れて一切無智昏愚なるが如し是れ真正の無
 我にはあらず況んや專唱の力らに依て淨土へ行んと計り佛けに成らん
 と疑するとや行く底これ何物を成する底是れ何物を成に非ずして是什
 麼んど謂ふ事なかれ然らば則是れ斷滅の所見なりと是れ斷なりや是不
 斷なりや真正見性の上士に非ずんは輒く知る事能はじ真正清淨の無我
 に契當せんは欲せば須らく嶮崖に手を撒して絶後に再び蘇つて初て四

禪 學 碑

徳の眞我に撞着せん嶮崖に手撒すとは何ぞや一人あり錯つて人迹不到
 の處に到つて下無底の斷岸に臨めり脚底は壁立苔滑かにして溼泊する
 に地なし進む事得ず退く事得ず只一個の死あるのみ纒かに頼む處は左
 手に薛蘿を捉へ右手は蔓葛にすがつて且らく懸絲の命を續ぐ忽然とし
 て両手を放撒せば七支八離枯骨も亦た無けん學道も亦然り一則の話頭
 をとつて單々に參窮せば心死し意消んで空蕩々虛索々万仞の崖畔に在
 が如く手脚の着べきなし去死十分胸間時々熱悶して話頭に和して心
 身共に打失す是を巖崖に手を撒する底の時節と云豁然として蘇息し來
 れば水を飲で冷暖自知する底の大歡喜あらん是を往生と名づけ見性と
 云只肝要は此の專念の扶けに依て是非是非一回自性の本源に徹底すべ
 きぞと勵み進み玉ふへし唯千万疑ひ玉ふべからず見性の外に成佛なく

禪 學 碑

見性の外に淨土なき事を三界無比の大聖一切衆生の導師なりと渴仰せられさせ玉ふ十力調御の世尊如來も雪山に入て一回見性し玉はざりし以前は流轉常没の凡夫に同じく八千度の往來は歷玉ひき見性大悟の曉にこそ正覺の眉を削き玉ひける者を見性の外に成佛ありと心得見性の外に淨刹ありと心得んする人は上もなき不覺なるべし觀世大士の生身にて渡らせ玉ふ二十八代の祖師達磨大師の如きは遙かに十萬里の鯨波を凌いで諸經諸論に不足もなき漢土の如來直授の佛心印を傳へんとて渡り玉ふと聞き及ひにたりければ如何なる大事をか傳へ玉ふぞと人々目を拭い襟を正して渴仰し申しけるに只見性成佛の一事をのみ授け玉ひにき破相悟性等の六門を設け玉ひにたれども畢竟見性の一處に收歸せり然れども衆生無量なる故に法門も又無量なり中に就て往生の一門

釋學釋

は耆提希獄中の患難を救はんが爲めに假りに且く設け玉ふ若し往生の一事を以て佛法の至要なりとせば祖師只二三の書を裁して漢土へ送り玉は、足れらくのみ曰く專唱稱名して淨刹に往生せよと何ぞ煩はしく千辛万苦の風波を凌ぎ全身を鯨鯢の腮に懸て漢土へ渡り玉ふへさや如來も亦然り初より淨飯王宮の中ちに在して耶輪陀羅瞿夷女等の妃嬪と共に娛樂を窮め玉ひ位十善に登り富み五印を有ちて末後に稱名念佛して淨土に往生し玉は、足れらくのみ何の心そや金輪の王位を振り捨て苦行六年阿羅羅迦摩羅の仙人に責め使はれ其後ち深く雪山に入て葦簾に股を突き貫くをも覺へ玉はす目のあたりへ雷の落て牛馬を打ち殺たるをも知り玉はぬ程深く大禪定に入り玉ひて通身瘦衰へ玉ふ事絲もて瓦を編たてたる如く皮骨連立せり遂に臘月八夜明星を二見して初て

釋學釋

見性大悟高聲に唱へ玉はく希有なる哉一切衆生如來の大智慧徳相を具すとは是より山を出來て頓漸半滿の教を説宣玉ふに乏き事なし此に於て十號具足果滿妙覺の如來と仰かれ玉ふ是れ彼の善慧大士の謂ゆる頓に心源を悟つて寶藏を開き玉ふに非すや澆季末代壞劫法滅の末世といへとも佛子たらん者の尊信すへき芳躅ならすや大凡番々出世の如來歴代傳燈の祖師及び一切の賢聖智者高僧に至るまで其の所傳の秘訣行持の内證を探るに盡く自性の法門を至要とす蓮如上人の如きも平生往生不來迎の往生と説れけるよし願ふに是亦これ見性の眞理にあらずや深く海藏の底を探つて五千餘卷の金文を五度ひまで究め玉ひ王侯より庶人に至るまで生身の如來の如く仰き貴はれ玉ひし法然上人の如きも常に悲嘆し玉ひけるは特り教内の理に暗からざるのみに非す教外の心宗願

を探る先達なき故に索短ふして深泉を汲ます翼さ短ふして長空に翔らざる心地なりと論置れける由教外の心宗とは何をか云や此の見性の法門に非すや至人の一言毫釐も欺き玉はす寔に恐るへく敬しつへし神祇冥道も恭敬し尊重し玉ひける程の止ことなき上人だにも斯望み深くをはせし見性の大事なるものを今の人々の慢り玉ふは罪深きこと覺ゆれ蓋し理はり知り玉はぬ上には左ばかり罪み科にもならぬにこそ惠心院の僧都の如きは廿四歳にして自性の大圓鏡と琢磨せんとて横川に入り玉ひしより晝三部の法華經夜六万聲の念佛中間片時も怠惰し玉はず行年六十四歳にして初て自身眞如なる事を識得すとの玉ひけるよし寔に貴ぶべし自身纔に眞如なる時山河大地万像森羅草木國土有情非情同時に不變眞如の全體と現出す是れを寂滅現前見性了悟の時節とす高野の

明遍僧都五十餘歳の秋深く念佛三昧に入り玉ふ時高野大師正しく藕絲の袈裟并に一紙の全文を授け玉ふ其略に曰く西方の一方を指す者は方便なり九域を籠して亂心を止む畢命を期として名を稱せば心眼即開の大益を得んと心眼即開直に是見等性の時節なり大凡世尊一代五千餘卷の金文有て頓漸秘密不定の妙義を説き演べ玉ひたれども畢竟此の見性の大事を出ず故に經に曰く唯此一事實餘二即非真と去る程に三世古今の間に見性せざるの佛祖なく見性せざるの賢聖は必定決定無き事なり山野七八歳より心を佛理に傾け十五歳の時出家十九歳にして行脚廿四歳にして初て此の見性の大事に撞着す其後叢林を經普ねく諸知識の門闢に跨がり博く諸論を經窺ひ略三教の經典を深り及び諸子百家をさへに若し一法の自性の法門に超過せる有らば莊老列の道と雖ども必ず信

受し推し弘めんと誓ひ侍りき今年六十五歳に到つて終ひに見性の大事に過たる法理を見ず左も侍らすは何しに妄りに紙墨を費やして覺へも無き事を書付け高覽に入れ侍るべきや只返す返すも見性の助けに便りよく侍べらば絶へずりも無く唱へ進みて一心不亂の田地に到り玉はば必定大歡喜の眉を開き玉ふべし若しそれ無の字を打捨て佛名を唱る事は專唱稱名の力らに依て見性分明に直に佛祖の骨髓に徹底する事を得ば是可なり縦ひ見性明白なる事を得ずとも稱名の功力に依て死後には必ず極樂に往生せん是れ一舉兩得万全の良策なりとの底意ならば早速稱名の修行を放下し純一に無の字を擧揚し玉ふべし何が故ぞ斯れば是二百年來禪苑を荒廢し眞風を蕪害するの惡風俗杜撰の禪徒鄙俗下賤の邪見解なり夫れ禪宗は孤危が上にも轉た孤危ならんことを要し祖庭は

峻峻が上にも轉峻峻なるを貴とす常に要津を把定して凡聖を通ぜず一
 言を出す則は三賢魂蕩し四果眼眩す一句を吐く則は閻神恐れ走り野鬼
 悲み哭す木人の腹たら割と石女の髓を敲く棟梁の質あつて神俊の才を
 具する底の英伶の學者を見る則んは難透難解難信難入底の話頭を放つ
 て正法眼蔵を瞎却し涅槃妙心を攙奪す學者も亦盡毒の郷を過るか如く
 水も亦他の一滴をうけず豎に咬み横に參じて情量の窟宅を破り智解の
 窠臼を抜き理盡き詞は窮まり心死し意消して忽然として凡に非す聖に
 あらず佛にあらず魔に非る底の奇怪の鈍瞎漢を放して以つて佛祖の深
 恩を報答す斯の如き的手段を法窟の爪牙と名け奪命の神符と云大ひに
 上々根機の人に利あり中上の機は閑ひて顧りみず淨家は却つて是れに
 反す是れ又た敬しつべきの一門なり無量壽尊大慈善巧の專修にして六

禪 學 譚

禪 學 譚

八の大誓に本つき三四の修心を具す専ら中下の機の爲めに設けて無智
 昏愚の衆生を利し十惡五逆の罪累を抜く攝取不捨の金言を主として下
 きが上にも下きを要とし易さが上にも轉易さを貴しとす此故に言縱ひ
 一代の教を能く能く學したりとも一文不知の愚鈍の身になして只一向
 に念佛せよと澆季末代五濁亂滿の邊土に一日も欠くへからざる善巧なり
 禪門は力士の長けを闘はしむるに等し高さを以て勝れりとす淨家は侏
 儒の長けを闘はしむるか如し矮さを以て勝れりとす禪門の高さを悪ん
 て是を廢せば佛心向上の眞風は土を拂つて泯没せん淨家の矮さを嫌つ
 て是を廢せば昏無愚智の部屬は惡趣を出る事能はし願ふにそれ佛は大
 醫王の如し八萬四千種の方劑を設けて八萬四千種の病根を抜き禪と云
 ひ教と云ひ律と云ひ淨と云ふ各々是病に應する一方なり譬へは世に士

と云ひ農と云ひ工と云ひ商と云ふ此四民あるか如し士は智仁兼備へ略略並へ全ふして王位を鎮護し逆徒を従かへ天下を泰山の安きに置き君を堯舜の君にし民を堯舜の民にし喚らされども民斧鉞よりも畏尤も嚴重なるを貴しとす重んずべきの美器なり商は大店を張り貨財を通し錦繡綾羅絹帛綿布及び粟米蔗果魚肉をさへに廣きを以て好とす緇素男女老幼尊卑其求めに應せずと云事なし士若し商賈の廣きを羨み財利を貪り行ひて商賈の態を作さば大ひに射御を廢し武藝も亦忘れて笑を朋友に惹ん主人も亦大ひに喚つて此れを擯出せん商も又士の嚴重なるを羨み劍を帶し鞍馬に跨つて戎面して亂りに西東に走らは人それ大ひに笑はん家道も亦廢せん向に謂ゆる禪を得すんは命終の時淨土に生せんと兩端に涉つて修行せん人は魚も得ず熊の掌も亦得ず却て生死の業根に

培かい命根截斷圍地一下の歡喜は努々是有へからず無の字と名號と兩般なしと申す中に得力の遲速見道の淺深に到つては少しき子細無きにしもあらず大凡辨道參玄の上士情念の滲漏を塞斷し無明の眼膜を觸破するに到つては無の字に越たる事は侍るへからず去程に五祖の演禪師の頌に趙州の露刃劍寒霜光焰々更擬問如何分身作兩段總して參學は疑團の凝結を以て至要とす此故に道大疑の下に大悟あり疑ひ十分あれは悟り十分有り又佛果和尚の曰く話頭を疑がはざるを大病とすと參玄の人纒かに大疑現前する事を得ば百人千人が千人ながら打發せざるは是有るべからず若し人大疑現前する時只四面空蓋々地虛豁々地にして生に非ず死に非ず萬里の層氷裏にあるが如く瑠璃瓶裏に坐するに似て分外に清涼に分外に皎潔なり疑々呆々坐して起事を忘れ

起て坐する事を忘る胸中一點の情念無ふして只一箇の無の字のみ有り
 恰かも長空に立つが如し此の時恐怖を生せず了智を添へキ一氣に進ん
 で退かざる則んは忽然として氷盤を擲摧するが如く玉樓を推倒するに
 似て四十年來未だ曾て見ず未だ曾て聞ざる底の大歡喜あらん此時に當
 つて生死涅槃猶如昨夢三千世界海中の漚一切の賢聖電拂の如し是を大
 微妙悟圈地一下の時節と云ふ傳ふる事得ず説く事得ず恰かも水を飲で
 冷暖自知するが如けん十方を目前に銷融し三世を一念子に貫通す人間
 天上の間那箇の歡喜かこれに如ん是れ等の得力は學者親切に進まば纒
 かに三日五日の功にして必ず得ん如何が大疑現前する事を得んとなら
 ば靜處を好まず動處を捨てず我が此の臍輪氣海總に是の趙州の州無無
 の子何の道理か有ると一切の情念思想を抛下し單々に參窮せんに大疑

譯 學 障

現前せざる底は半箇も亦無けん如上大疑現前純一無雜の體裁を聞き及
 ばれては怪しく恐ろしく氣味わるき事に思し召さるべけれども無量劫
 來生死の重關を踏破し十方の如來本覺の内證に徹底する程の目出度き
 大事なる者を左ばかりの艱辛はあらではあるべきと覺悟せあるべし熟
 顧ふに無の字を參究して大疑現前し大死一番して大歡喜を得る底は數
 限りも無く是あり石號を唱へて少分の力を得る底は兩三箇ならでは聞
 及ばすなん待り惠心院の僧都も智徳と云ひ信心力と云ひ無の子か麻三
 斤の話など參究し玉ひたらんには自身真如なる程の事は一月二月乃至
 一年半程の中には發明し玉ふべきものを名號誦經の功によりて四年
 の精彩を盡し玉ひたるなるべし是れ唯疑團のをはするととはせざるに
 に依れり須らく知べし疑團は道に進む羽翼なる事を法然上人の如き道

譯 學 障

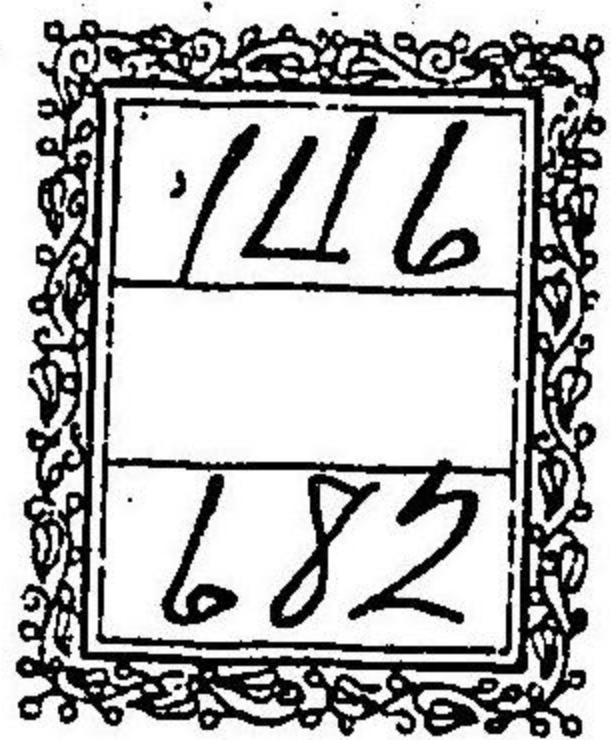
德仁義精進勇猛暗中に聖教を披覽し玉ふに眼の光を用ひ玉ひける程なれば少し疑團たに在したらんには立地に大事了畧し往生決定し玉ふべき者を世索短ふして深泉を汲まざる杯悲歎し玉に及んや去程に楊枝黃龍眞淨息耕佛鑑妙喜の諸老をさへに大凡百千億の諸佛名あり百千億の諸神呪あり授與すへき舉揚すべく法門は不足も無き中に特り此無の字を與て楊舉せしむ豈に長處無らんや願ふに無の字は疑團起り易く名號は疑團起難き故なるべし然るに禪門に於專唱稱名往生希望する事は古へ禪苑凋枯せず眞風未だ地に墜ざりし日は一向に無き事也西天の四七唐土の二三傳燈歷代の祖師南嶽青原馬祖石頭百丈黃檗南泉長沙臨濟興化南院風穴首山汾陽慈明黃龍眞淨晦堂息耕妙喜及び五家七宗の諸老とさへに梁陳隋唐宋元の間六朝の大宗匠各々孤危の宗風を立して臂に兼

命の神符を繋げ口に法窟の爪牙を咬嚼して只宗風の地に墜ん事を恐れて晝夜に願輪に苦つて屹々として怠る事無し破口にも往生淨土の事を論せず悲哉時乎命乎大雅枯れて桑田湧き古曲墮して弊術寢ふ流へて大明の末に至つて棲雲の殊宏なる者あり參玄力ら足らず見道眼暗ふして進むに寂滅の樂みなく退くに生死の恐れあり悲嘆押さへ陸難く終に蓮公蓮社の遺韻を慕つて祖庭孤危の眞修を捨て自ら蓮池大師と稱して彌陀經の疎鈔を造り大に主張して後學を引く鼓山の元覺永覺大師淨慈要語造つて擊節して輔佐く此に於て漢土に普く扶桑に溢れて終に教ふ事無きに至る假令今の世に當つて臨濟德山汾陽慈明黃龍眞淨息耕妙喜の諸老臂を褰け胸を切り手に睡さして攘斥すと云ども此狂瀾を廻す事能はし是全く淨業の宗旨を決し專唱し修行を輕蔑するに非ず禪門に

在りなから禪定を修せず參禪に傾く志行懶惰にして見性眼昏く禪學力
 ら乏しふして茫々として一生を過さ了つて命日庵牕に遁るに及んで來
 生永劫の苦輪を恐れ俄かに欣求淨土の行課を勤め在家無智の男女に對
 しいかめしげに長念珠かい爪くり高か念佛しなから宋代下根の我れ等
 に似合たる歷離穢土の專修に超へたる事は侍らぬを豊など頭へ禿るに
 齒疎なるか動もすれは殊勝げに打泣き打泣き目をしは扣きて口説立た
 るは實々しけれども従前曾て勤めざる禪定何の利益か有ん従前曾て修
 せざる禪學何の験驗か有らんこれ等の族は禪門に在りなから禪門を勝
 倒す蠶啄の虫の梁柱より生して却て梁柱を割くか如し點檢せずんは有
 るへからす壯年の懶惰懈怠は却て老の憂惱悲歎となしぬ老來の憂惱悲
 歎は責るに足らず既に往しとは咎めし壯年の懶惰懈怠は各々宜く恐れ

すんはあるへからす大明以來此黨甚た多し盡く是庸才懦弱の禪徒なり
 三十年前去る老宿の悲嘆せられけるは嗟衰へたる哉向後三百年を過さ
 は天下の禪苑盡く總盤を張り木鐘を居へ六時禮讀四隣を驚かすに至ら
 んと云て落涙せられける由し寔に恐るへし老僧最後親切の一着あり眉
 毛を惜ます殿下の爲に擧揚し去らん一喝の會を作す事なかれ陀羅尼の
 會を作す事なかれ況や崑崙に棗を吞玉はんをや作麼生か是親切の一句
 僧趙州に問ふ狗子に還つて佛性有りや否や州曰無 穴賢

禪學譚下之卷畢



明治卅四年十二月一日印刷
同 年十二月十日發行

(定價金貳拾五錢)

編輯者

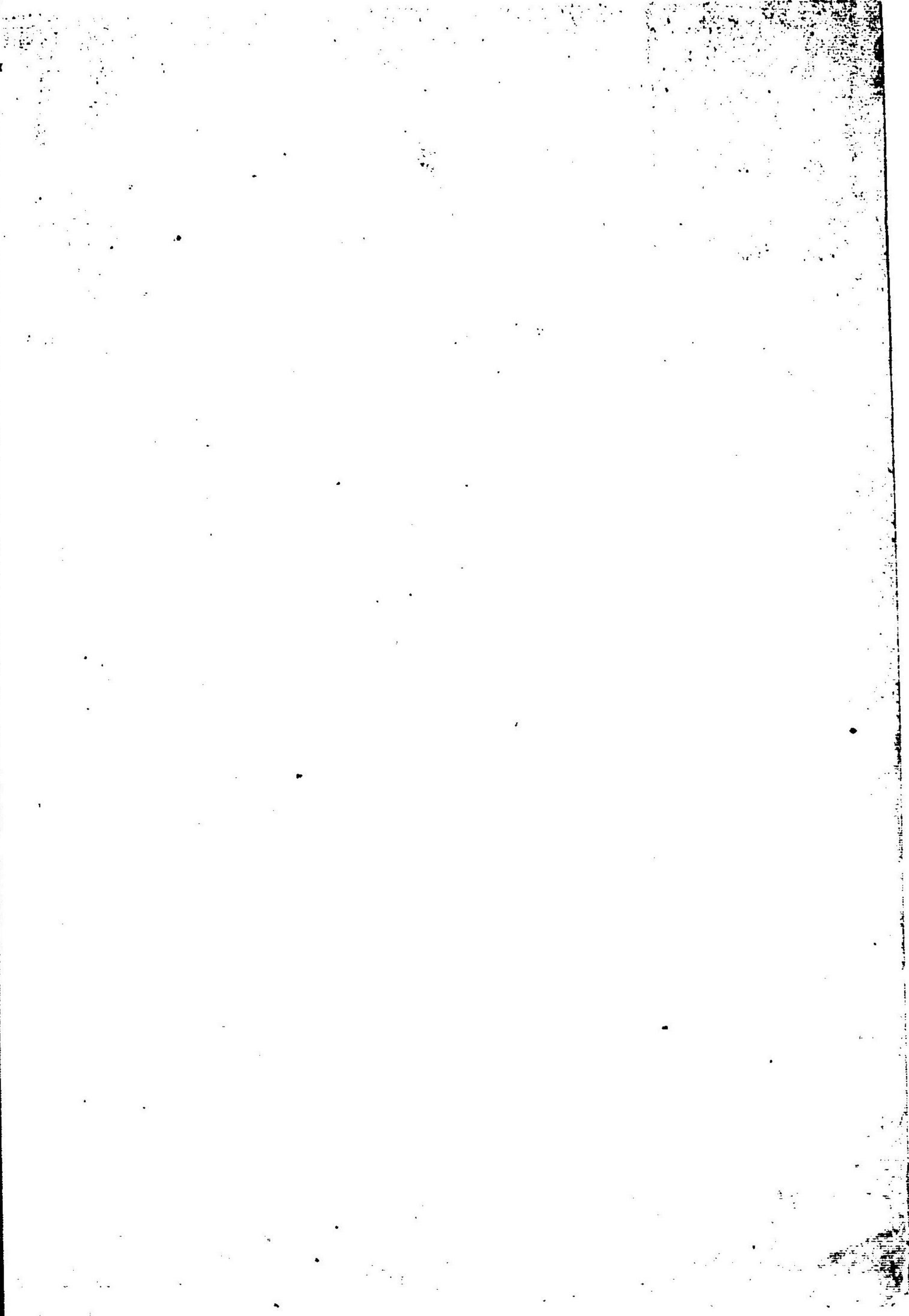
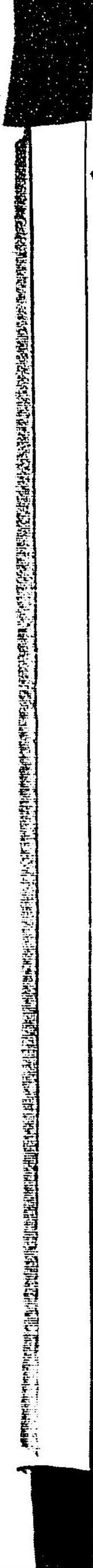
京都市寺町通押小路下ル
八 阪 淺 次 郎

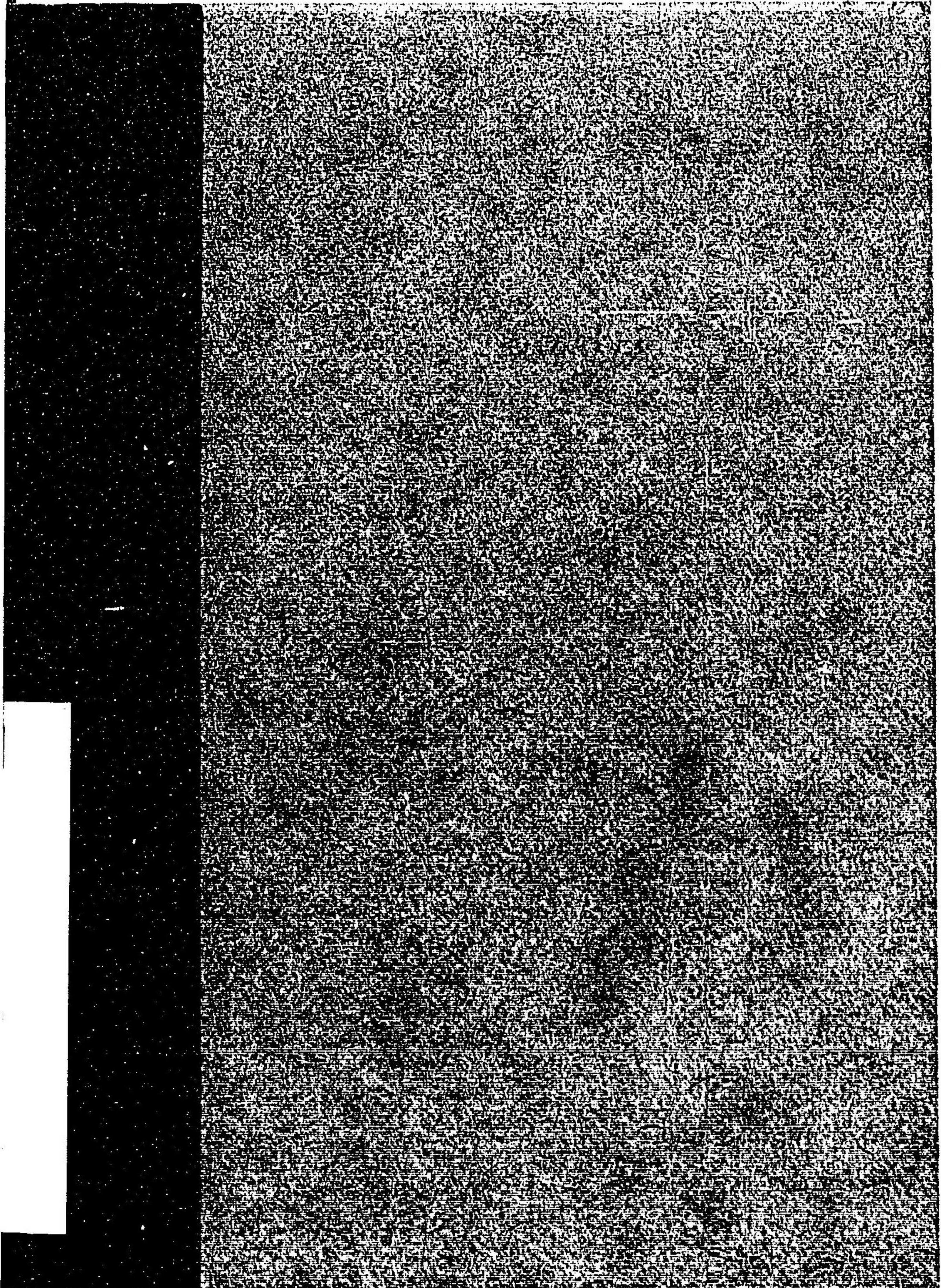
印刷者

京都市醒ヶ井通五條下ル
中 川 源 之 助

發行所

京都市寺町通押小路下ル
八 阪 弘 文 堂





特61

26

禪 学 譚

国立国会図書館

019602-000-2

特61-26

禅学譚

白隠 / 述

M34.12

ABG-0382

